340
36

始

340-36

蓼莪

大正
5.1.29
内交

自序

趣味からやる旅もある、修養の爲めにやる旅もある、見聞を主とする旅もある。その孰れでも可い、居は氣を移すと云ふことが實際である以上、旅は確かに新面目を開かせる、旅は確かに心機を一轉させる。

四疊半に立籠つても、胸中に天地の萬象を藏するならば、其人は世界を家としたも同樣である。而かも此の域に達するには唯二ツの途がある。靜的な坐禪默想と動的な旅行行脚とである。シテ此の二ツの方途

が全然一致した一ツの道であることは、雲水の修行がそれを證據立てゝをる。

趣味も、修養も、見聞も皆世界的であつて欲しい。『世界を家として』は、私の小趣味小修養小見聞である。

大正六年春　　柯公生

（書籍所蔵物博覧会）　遊の主地の亞西墨

目次

浴衣がけ……一
一　はしがき……一
二　東海道の復活……六
三　日本アルプス……一〇
四　松原……一五
五　水都水郷……一九
六　松花江の鯉……二三
七　所謂洋行……二八
八　奥の細道……三二

九 アルプと雪山……三六
一〇 朝鮮耶馬溪……四一
一一 洞庭湖の鞭……四五
一二 南洋の珍果……四九
一三 駕籠と草鞋……五二
一四 八景の勝……五七
一五 福島將軍……六二
一六 島巡り……六六
一七 山……七一
一八 比律賓の食事……七五
一九 南洋の旅興……七九
二〇 旅と酒……八三

二一 西伯利道中……八七
二二 畫家と旅……九一
二三 富士……九五
二四 入鄉從鄉……一〇〇
二五 北雁南鴻……一〇四
二六 啞の旅行……一〇八
二七 旅の用意……一一三
二八 路銀……一一七
二九 支那學者……一二一
三〇 航海の樂……一二五
三一 記念物……一二九
三二 比較地理……一三四

三三 探檢……一三七
三四 瀬戸内海……一四一
三五 宿屋是非……一四五
三六 汽車の中……一五〇
三七 寺と橋……一五四

江戸より東京(東京の今昔)……一五八

萬里行……一九七

一 序言(上)……一九七
二 序言(中)……二〇二
三 序言(下)……二〇六
四 アルプス登山(上)……二〇九

五 アルプス登山(下)……二一三
六 伊犁遠征(上)……二一七
七 伊犁遠征(下)……二二〇
八 熱帶植物園……二二四
九 高野山……二二九
一〇 新羅千年の都……二三三
一一 君士坦丁堡……二三八
一二 新高山……二四一
一三 希臘懷古の遊(上)……二四六
一四 希臘懷古の遊(下)……二五〇
一五 淺間山の渦煙……二五五
一六 巴奈馬とアンデス……二五八

一七 南國の遊（上）……二六二
一八 南國の遊（下）……二六六
一九 イスランド……二六九
二〇 長江と洞庭湖（上）……二七三
二一 長江と洞庭湖（下）……二七六
二二 貝加爾より黑龍江……二七九
二三 印度遠征（上）……二八三
二四 印度遠征（下）……二八六
二五 滿洲探勝……二九〇
二六 臺灣縱斷（上）……二九三
二七 臺灣縱斷（下）……二九六
二八 間島遍歷……二九九
二九 中央亞細亞……三〇二
偉大なる鄰人（露西亞我觀）……三〇六
碧瓦紅欄……三二四
I 夜のマニラ……三二四
II クックの上陸地……三二八
III 海外出稼婦……三三三
鄰境遊記……三四六
一 羅朝千年の舊都……三四六
二 雨打風敲千餘年……三四八
三 高麗王宮之古蹟……三五〇

四　千山行の敎訓……三五一
五　昭陵の荒廢……三五五
六　日本趣味の土產物……三五六
七　金の古城……三五八
八　嫩江畔の非中國人……三五九
九　後貝加爾地方……三六一
一〇　チタ瞥見……三六三
一一　貝加爾湖畔の風光……三六五
一二　貝加爾廻湖鐵道……三六八
一三　アンガラ河畔の市……三六九
一四　博物館……三七三
一五　地名上の疑義……三七五

一六　黑龍江の河船……三七七
一七　江上の火輪船……三七九
一八　植民の苦心……三八〇
一九　江上の曳船……三八一
二〇　兩岸の紅白燈……三八二
二一　漠河附近の景……三八五
二二　大黑河村……三八六
二三　船中の灸點……三八八
二四　浦港の誇……三八九

旅裝遊具……三九一

一　古人の旅行用意……三九一

目　次

二　準備と覺悟……二九七

目次終

世界を家として

大庭柯公著

浴衣がけ

一　はしがき

午睡の前後か浴後の籐椅子の上で、日本六十餘州は勿論支那四百餘州から五大洲の山岳河川を浴衣がけで夢想的に經廻りたいのが私の希望である。大町桂月君は先日芳賀博士の送別會で『涼しさや裸で

周遊る全世界』と云ふ餞別の句をものされたやうであるが、裸で道中がならぬことならせめて浴衣がけでやりたい。が併し『浴衣がけ』の題目は實は齋藤拙堂紀行文詩中の『白衣漫吟』の意を一寸借用したまでゝある。

クック社と云へば世界到る處の遊覽案内屋として規模の雄大は固より敬服すべきであるが、同樣な組織が昔の我國に全然なかつた譯ではない。假へば東海道始め各道中筋には一進講とか何講とか云ふのがあつて、旅行者の案内と便宜を計つたものである。特に神佛への參詣を主眼とする講の組織に至つては我國のそれは頗る發達したもので伊勢講、太々講、御嶽講の如き皆興味ある組織である。又西洋人の間には世界的の案内書としてベデカーがあるが、吾等の祖先も亦頗る丹精を凝らした各種の名所圖會を作つてをる。

西洋人は或意味に於て旅行民族とも云ふべきである。金持も貧乏も男も女も一般に旅行好きだ。避暑避寒は勿論結婚當夜から旅行に出かける程であるが、實は日本人も旅行趣味に於ては決して西洋人に敗けるものではない。卽ち山水を解し之を詩化し之を美化する點に於ても亦固より西洋人に劣るものではない。『奥の細道』の芭蕉、『蹇國雜記』の宗祇、『裝遊稿』の嵐雪、『日本行脚文集』の三千風等は俳人中の大旅行家である。今日でも碧梧桐君は『三千里』『續三千里』等の大旅行に續いで、昨年は日本アルプスの嶮を攀ぢ、今夏は復羽黑山の峭を辿る積りと聞く。勿論俳人ばかりではなく、國學者も漢學者も史家も、畫家も皆それ〴〵旅行の不便極まる時代に、相應に大旅行を爲してをる。

只探檢と云ふことになると個人的のものも團體的のものも、殘念な

から邦人は未だ西洋人に及ばぬ。シャックルトン氏と白瀬君との差はペングイ鳥と家鴨ほどの相違で、到底比較にならぬ。光瑞門下の諸俊のパミール高原や、日野強君の伊犂行なども竟に一スウェン・ヘディンの探檢旅行に及ばぬ。架空極まる冒險談や探檢小說は近來一派文士の好んで書くところで亦青年子弟の間に爭うて讀まるゝ傾向があるが、探檢的精神は國民の如何なる部分にも少しも閃いてをらぬ。志賀矧川君は一時西藏探檢を計畫されたやうであつたが實行は延ばされた。入藏者としては今の處兎も角も英のヤングハスバンド大佐を筆頭に推さずばなるまいが、アレは寧ろ政治的必要に出でた遠征である。西藏の學術的探檢だけは是非とも日本人の仕事としたいものである。

併しながら過去五六十年間に於て邦人の足跡は可なりに世界各地

に行渡つた。安政七年に幕府使節の米國渡航以來、歐山米水は勿論、各大洋上の島嶼に至るまで可なりに踏破されて居る。

否獨り海外各地とのみ言はず、海內の諸名勝から凡山凡水に至るまで隈なく探勝される。「日本アルプス」と云ふ言葉は近頃の流行語で、此處を覗いて來ぬと新しき男と云はれぬやうな感がある。雪嶺博士は「日本アルプス」などと云ふな、寧ろ「日本ヒマラヤ」と稱へよなどと油を注けられる、愈以て新しき健兒が簇生するであらう。

實に喜ばしきは旅行趣味、登山熱の向上である。只囊中自から涼しき連中と夏季の休暇も兎角心に任せぬ仲間と共に、予は紙上に萬里の清境を開拓したいと思ふ。

二　東海道の復活

十返舍一九で文藝的に、廣重で藝術的に最後の幕を閉ぢたと思はれた東海道五十三次は、亞米利加の彌次郎兵衞お札博士スタール君によつて、どうやら復活したらしい。尤もその前に美術院派の大觀、觀山、未醒、紫紅諸畫伯の東海道藝術旅行があつて、アノ評判の『東海道繪卷物』といふ產物が出來上つてゐる處などから考へると、東海道舊宿驛の復活が必ずしもスタール博士の膝栗毛にのみ因るとも云へぬが、五年前に芳賀矢一博士が『東海道五十三次』一卷を公にされた當時は、東海道旅行に就て何等一般の感興を惹起してをらぬ。どう見ても東海道の道中趣味は大觀、觀山あたりの繪卷物旅行に開かれて、スタール博士の彌次喜多式膝栗毛旅行によつて確に復活の氣分に向いて來たらしい。併しながらスタール博士のお札旅行も、詮ずる所廣重の五十三次の繪から浮び出でた想ひ着きに相違ない。隨つて半世紀の久しき間、荒廢のまゝに捨てゝ顧みられなかつた東海道が、米國一學者の膝栗毛旅行によつて、新道中旅程として大正の今日邦人の間に復活したことが事實ならば、丁度寫樂や廣重の浮世繪を西洋人から見出されて、初めて其藝術的價値を認め得た邦人の狼狽方と同樣、東海道は汽車で往來するものと定め込んでゐたことを、我等は今內々で恥入つてをる姿である。

『東海道は傳說と歷史、風景と藝術詩歌、社會學と經濟學、往古と現今の狀態比較』を研究することはスタール博士の言はゝほど多大の興味がないにしても、又勿論『十返舍一九や廣重の時代のやうに今の日本にヴァイタルなものでない』にしても、之を旅行眼より觀、之を浴衣

がけ趣味より見て、決して棄て難い史蹟習俗と繪のやうな巒峯湖河を藏してをることは事實である。然るに文人畫家の徒や一般旅行者が商用專門の旅客同樣、此の興味ある宿驛を十數時間の汽車の窓の眺めに委し去つて、又膝栗毛に秣かうて五十三次に我國特有の旅行趣味を味ふことを忘れたのは、彌次喜多二子に對しても誠に相濟まぬ氣がする。

海水浴と云ふ名の下に大磯へ出かける人は一ト夏幾千人か若くは幾萬人を算へることであらう。而も彼等の幾割が鳴立澤に西行の事蹟を偲ぶであらうか。若し更に西行を理想として其風雅を追懷した元祿の俳人大淀三千風が此地に草庵を結んで第二の西行たりし事蹟に至つては、知る者蓋し大に稀であらう。旅行の樂みの中では此種の風雅に富んだ追懷が第一である。土地の名物も亦然りである。東京

には全國各地の名物を店頭に列べて、一呼吸の內に數百里外の名物も味へるが、旅行の趣味は其土地の風光を背景にして名物を賞翫するに在る。鞠子の宿は如何に荒屋であるにしても、とろゝ汁は此處でこそ初めて珍味と爲る。妙なブヅ〳〵のある薯汁で全然布哇のポイに似てゐるなどと無風流な評を下したのはスタール君の千慮の一失である。小田原うゐらうは彌次喜多でないにしても餅菓子の類と間違へるに何の差支があらう。避暑の客舍に斯んな喜劇を演じて五十三次趣味を味ふも亦銷夏の一興に相違ない。其手は桑名の燒蛤など云ふ洒落は、恐らく參覲交代の道中で然るべき粹士の唱へ出した德川文化の賜に相違ない。實際に桑名の宿に客となつて松かさを焚いて燒いた此の珍味と共に、二三百年來の此の洒落を味うたならば、東海道舊宿驛の膝栗毛旅行も亦新らしい面白味を感ぜずには居られまい。私は

昨今旅行趣味の勃興時代に東海道舊宿驛の復活を喜び且祈るものである。

三　日本アルプス

日本アルプスは近來流行兒となつた、去年から今年へかけては愈賣ッ兒となつた。極めて舊式の店だと思つてゐた榛原までが團扇の廣告に利用するやら、兜ビールなどと武張つた名の麥酒會社が涼を日本アルプスに趁ひ快を兜ビールに取れなどと意義頗る不明瞭な廣告をやる。かく團扇屋やビール屋に利用された處から見ると、日本アルプスと云ふ名は最早今日では「高い」「清い」「涼しい」など云ふ代名辭に何時の間にか流用されてをる。處が物は隱れたる時代に於てのみ神

聖で、丁度巖面樹根の苔のやうに仙味や詩趣を自然の儘に蓄へてをるが、一旦世間へ知れ渡つて呼び物となり流行ッ兒となると、直ぐ其日から俗了するものである。日本アルプスなども其眞を尋ね其嶮を攀ぢんとならば、來年よりは今年、少くとも兩三年の内に壯遊を試みるに如くはない。

元來日本アルプスの稱はチャンバーレン氏が今から三十餘年前初めて飛驒山脈に命名したもので、其後ウェストン氏が今より十數年前幾度か登山跋渉して『日本アルプス』の著を公にして以來、此名が漸く中外に喧傳せらるゝに至つたものである。それに又逸早く目を着けたものが小島烏水君である。茲に至つて世人は横濱正金銀行の帳簿の中から、日本一の大登山家が飛び出たのを奇蹟のやうに驚いてをるが、其實烏水君の日本アルプスは筆と目とが餘程先んじてゐて、肝腎

の脚はそれほど運ばれてをらぬやうに私は思ふ。探檢的登山と云ふ點からすると、昨年の夏一戸理學博士が唯一回の日本アルプス縱斷にも遠く及ばぬと思ふ。只日本アルプスの忠實なる紹介者たり又流行ッ兒たらしめたる名譽に至つては、飽までも之を烏水君に捧げずばなるまい。

全體「日本アルプス」とは頗る高襟な名であると同時に、稍穩かならぬ名である。折角我國の代表的連峰たる此の山脈にアルプスの名を冠せずとも可ささうなものであるとは帝大の一部あたりにも聞かれた說である。斯うなると「日本ヒマラヤ」と云ふのも同樣の非難があらう。ツマリは飛驒山脈とか中央横斷山系とか云ふより外なからうが、實は飛驒山脈の最初の探檢者たる名譽が大阪造幣局の御雇外人たりしキリヤム・ゴウランド君によりて早くも明治の初年に占めら

れ、明治十二年には更に一外人によつて之に關する論文すら公刊された事に想到すると、我が尊き大山系に外國的名稱を附せられても邦人は異議の申立やうがあるまい。

が併し此の大山脈の學術的探檢こそ外國人に先鞭を着けられたものゝ之を膝栗毛宗から見れば我等の祖先は決して是等の高山を閑却した譯ではない。現に御嶽や立山は宗教的登山者の的であり、善光寺街道も亦此の山脈の庇の下に當つてをるではないか。就中立山はその山容の偉大と展望の開濶なるとに於て、他に多く其比を見ぬ。此點に於ては予は最も志賀矧川君の『日本風景論』中の所論を愛する。

『此脈や他の山系と獨立して越、信、飛の境界に盤踞し、日本本州の中部に人跡甚だ到らざるの寰區を作す、「石劒鑽青」の四字實に立山火山脈を代表し、「非人寰」の三字眞に此の寰區を盡くす、……麻衣

を着け鹿皮を穿てる山下の民は克く案内に應ぜん、乃ち米、味噌、鹽、漬物、罐詰、毛布、油紙、麻繩をこの輩に負はしめ、以て入らんか熊、鹿、カモシカは人を恐れざるものゝ如く、原人時代の形象は宛として目前に映出し來る。』

處が今日での立山溫泉の繁昌は寧ろ想像以上で、浴舍の頗る陋穢なるにも拘らず夏時の雜沓は名狀すべからざるものがある。坪谷水哉君の如きは明治三十六年所謂日本の瑞西たる飛驒に入つて『飛驒栗毛』などと洒落込んで旅行してをる。「ういよつらいよ中山七里、川の鳴瀨を鹿の聲」。東京驛の二階にあるツーリスト・ビューローの一室には器用に造られた日本アルプスの模型が備へ付けられてあるから、膝栗毛黨は先づ出發前に一覽して、千年の雪を此の大山系に探るがよからう。

四　松原

赤松亡國論などと云ふ所謂學者の議論が曾ては世の中を驚かした時代もある、尙其以前に遡ると東京のお濠の土手の二百年も經つた老松を惜しげもなく伐り仆さんとした時代もあつた。アノ茅渟の浦邊の泉州濱寺の見事な松原も、廢藩置縣匆々の知事樣が『無用の老ぼれ松伐て薪に利用せよ』との一聲の下に無智な地方民の斧に過半伐り仆された處へ、故大久保內務卿が丁度通り合はされ、驚いて松共の爲めに命乞ひをされて、漸く今の松林だけが生遺つた次第である。アノ松原に大久保卿頌德の碑が建てゝあるのを見ると、當年の吾等の親父共の沒風景を呆れざるを得ぬ。

津田松原や琴彈公園など云つても、東京の住人中で知つてをるものは何人あらうか。皆川淇園の琴林の碑文を漢文から和譯して見ると『津田村（讃岐寒川郡）に八幡さまがある、その東の松林は長さ三里餘、前面の海に枕して東南にうねり、無慮數千株の松は何れも皆危さうな態を作して白砂の上に綠蔭を印してをる、時に清風が吹き入れば、琴のやうな音が傳はる』と云ふのである。學者の紀事文は兎角誇張に陷るものであるが、淇園の此文は寧ろ此處の松林の趣を寫すに不足な點があると思ふ。邊鄙な西讃の地にあればこそ今日まで餘り世間に謠はれぬが、此の琴の松原が本州の幹線筋にでもあつたならば、我國第一流の名所の中へ夙に算へ入れられてをるに相違ない。日本の風景を感賞する上に於て近來邦人が松、松原、松林を餘りに閑却する傾きのあるのを私は頗る遺憾に思ふ。赤松は或は植物と地質學上の見地から亡

國的樹木であるかも知れぬが、日本の風景觀から云ふと赤松も黑松も、總ての松は皆なくてならぬ樹木である。隨つて我國の風光を賞美する上から松林や松原を今少し一般に優待して貰ひたいものである。松原と云へば只舞子の松ばかりを語り合ふ有樣では、外人遊覽客誘導など云ふことは思ひも及ばぬ。福岡なる千代の松原は舊記に『坤艮三十餘里、乾巽七八里、更無他木、唯青松而已』とあり、風土記は之を『十里の松』と名を付け、昔の朝鮮人すら『白砂三十里松樹林を成す』と賞美してをる。三千風は「箱崎や松が根かすみ歌枕」と吟じてをる。之を舞子の松原が龜屋の前栽に過ぎぬ小規模のものに比すれば、千代の松原は優に天下の勝地として誇るに足ると私は思ふ。或は舞子の如きも昔は須磨明石に亙つた大松原であつたものが、例の松原閑却病のために段々と縮小されて今の舞子の松とまで成下つたのではある

まいか。天の橋立は暫く措き、三保の松原にしても、興津あたりから、特に清見寺の庭から遠く眺めると、宛然一幅の繪で、假令風雅な士でなくとも舟を艤してアノ帶の如き松林に遊ぶ氣になるが、サテ三保へ着いて實地松原を踏むと、何人もその餘りに荒れたる漁村に過ぎぬことを驚かぬものはあるまい。羽衣の代りに網が干してあり、天女の代りに漁師の神さんが丸肌ぬぎの姿を拜見するなどは、自然の景と云へば云ふものゝ、白砂青松の松原の逍遙を夢想した遊覽客の理想ではなからう。私は決して三保の人達を咎めるのではない、一般に邦人が日本風景の上に有力な部分を占めてをる美しい松原松林を、餘りに閒却し冷遇するのを憤るのである。

例を擧ぐればまだ幾らでもある。アノ浦潮斯德から日本へ渡つた第一關門の敦賀に、灣に臨んだ見事な松原がある。敦賀人と云ふより

は寧ろ福井縣廳は何故に今少し此松原の利用法を思ひ着かぬであらうか。單に露人の遊覽客を招致する上から云つても、此第一關にあるアノ自然の松原に遊園的設備を施さぬと云ふことはない。二三年前に此松林の奥に溫泉宿を新設した報を得て私は或機會に行つて見たが、純然たる田舍の溫泉場で、その卑俗極まるに驚いたことがある。コンナ見事な松原を聯隊の兵隊共の演習場に宛てゝ其荒らすに任せたり、嘗ては濱寺一帶の松原を俘虜の收容所に宛てたりして、悔ゆることを知らぬ我國民は、今に松の罰を被るであらう。

五　水都水郷

水の都とは言ふまでもなくヴェネチヤであるが、私は彼處に初夏の

二日を過ごした時、端なくも霞ケ浦畔の水郷潮來を思ひ出した。そして垢抜けのした高襟をやるべく、伊太利なる此の水の都の月の夜に、ゴンドラを浮べて磯節を謠つて見たいと思つた。縱令流水行雲に天意の發露を見得るラスキンの審美眼はなくとも、苟くも西洋史の一端を知る者には史興に富めるヴェネチヤを感せずには居られまい。苟も水邊の景物を愛する者には詩趣豐なヴェネチヤを忘るゝことは出來まい。

或はヴェネチヤを我堺に比較する人がある。アドリヤチック海を瀨戸内海とし、ヴェネチヤ灣を茅渟の浦とするならば、ヴェネチヤは當に堺に相當する。否獨り地理の上ばかりでなく、兩者が世界的貿易港として或時代の間を輝いたことも亦同樣である。而も水の都としての氣分はヨリ多く潮來出島を聯想せしめる。詩佛が『試從十二橋頭望、何水何橋無月明』と潮來を咏じたる一句は、移して以てヴェネチヤ大小の運河を謠ふに足ると思ふ。サンマルコの寺は鹿島神社に相當するであらうが、惜いことには寺の前の極めて俗世間的な淺草觀音式の仲見世と鳩の群とは鹿島神社の森嚴崇高な氣分には及びも付かぬ。只一百二十の島嶼の上に築かれたる都市、縱横する運河の百五十、大運河の長さ三十町、幅四十間なる、而して大理石の橋實に三百八十橋、詩佛の句ではないが何れの水何れの橋も月を追うて月を得られざるなき實景である。故佐々克堂が伊太利漫遊中の句に『殘山剩水尙依々』とあるが、而もヴェネチヤの水だけは歴史經濟を通じての水で、却々に剩水どころではなく、此の水都の民と共に永久のものである。

只風景觀から比較するとヴェネチヤは竟に山水を收め得たる潮來の畫趣には及ばぬ。『あまりつらさに出て山見れば雲のかゝらぬ山は

ない』ヴェネチヤには此の山が見られぬ。兼葭蒼茫の間から筑波一帶の山を望むやうな水郷の背景がなく、霞ケ浦の景に一點色を添へる浮島の如き島影もない。ヴェネチヤの誇りは飽までもゴンドラと大理石の橋とである。潮來の舊記によれば『家は河中に作り出し舫町に乘り川向の出島に到る』とある、舫町が如何なる小舟であるかは分らぬが、埃及時代の戰艦を模した古雅なゴンドラには及ぶまい。ゴンドラの舟子が終始船尾に立つて曲折せる運河の辻々で、一種の掛聲を合圖に櫂の音閑けく輕く漕ぎ去る樣は、蓋し天下一品である。かゝる水路の舟行に水を渡つて傳はるサンマルコ寺の鐘聲は閑寂なゴンドラの氣分に調和するが、近頃漸く殖えて來たモーターボートや小汽艇のけたゝましき笛聲は、確かにヴェネチヤ趣味の破壞である。

然るに畫舫にも石橋にも代へ難い此地の名物が今一ッある、旅行の

神とも云ふべきマルコポロ其人である。此水の都に生れたマルコポロが歐亞の大陸を横斷し往復して東方の國々を西方の人々に紹介したと云ふことが、何となく神業のやうに感ぜられる。然るに霞ケ浦畔の佐原からも亦偉大な旅行上の一人が出てをるのは、更に神意の寓するものがあるやうに思はれる。偉人とは卽ち我國測量學の鼻祖にして地理學者たる伊能忠敬先生である。私は水郷潮來を記念するためにアノ有名な潮來節の漢譯を爰に書き添へる。『誰知洲畔菰蒲裡、開許輕盈燕子花』譯は詩佛の老手に係る。

六　松花江の鯉

第二松花江の名は先月あたりから邦人の注意を惹くやうになつた。

實の處を言へばアレは第一松花江と云ふべきである、露西亞の立場として西から東へと計へて、松花江に架する第二番目の鐵橋と云ふ次第であるが、今度日本の立場から見れば當然第一松花江であらねばならぬ、又上流下流の關係から云つてもそれが當つてをる。併し今更そんな國權論者めきた詮索は全く無用であるのみならず、旅行趣味や風景觀の見地からはそんな事に頓着はない。たゞ今後私の希望は我が內地人が哈爾賓あたりまで、松花江の鯉を味ひ松花江の血魚を喰ひに出かける者の一人でも多からんことである。松江の鱸と云ふのは後赤壁賦で邦人にお馴染の魚であるが、これは江蘇省の松江府の謂で、曹操が之を膾として大勢のお客に自慢で出したほどの巨口細鱗の魚であるから定めて佳肴に相違ないが、北滿なる松花江の血魚もアノ平原地には眞に想ひがけなき珍味である。露西亞人はこれをクラースナヤ・

ルキバ（紅魚）と呼んで吾人同樣頗る賞味してをる。肉は名の通り眞赤で、日本人には刺身が一番結構で、一寸鮪と云ふ格である。

私は幾度となく朝鮮を通つたが、數年前から密陽驛に鮎鮨を賣始めたのに非常に興味を感じたものである。鮎は勿論密陽河で捕れたもので、風味も至極結構、總てが山北驛のそれと同樣なのが嬉しい。是等は確に十百の法令にも勝る朝鮮の日本內地化の倔强な證明である。南滿の熊岳城でも熊岳川から鮎が取れるが鮎鮨のことは未だ聞き及ばぬ。

私は或る年の朝鮮漫遊の際に水源の農事試驗場に某農學博士を訪問した時、菓子鉢に添へられた白い箸が如何にも珍らしいものであつたので尋ねて見ると、朝鮮人蔘を干し固めてお菓子箸と洒落たのだと說明された。旅中の訪問としてはこんな處に興味を感ずるものであ

る。

鴨綠江の河口で取れる蛤は最早今日では內地人にも知れ渡つてをらうが、アノ大きさは亦格別である。味は多少大味ではあるが、普通の蛤の五倍乃至七八倍であることは兎も角も珍とするに足る。日本人が安東富士と名を付けた安東縣の元寶山でも眺めながら大蛤を喰ふのも亦豪傑的氣分を養ふ所以であらう。人或は蛤を喰つて豪傑になれるなどと云ふ馬鹿なことはないと難ずる者もあらうが、內地にばかり燻つて蜆貝のやうな心持でゐる男には、是非鴨綠江の大蛤を喰はせる必要がある。滿洲の高粱酒も飲ませるが可からうし、朝鮮の飴もしやぶらせるがよからう。所謂江戸ッ兒連も食傷新道とやらに通や粹を振廻さずに、せめては滿鮮地方に惡物喰ひと洒落込むべきである。意地の汚ない喰物のことばかり云ふなと難ずること勿れ。腹が減

つては旅も出來ぬ。旅へ出て食が進まぬほどの奴は、到底共に旅中の苦樂を俱にする譯には行かぬ。伊太利を旅行して日本人に嬉しい氣のするのは、何處に行つても饂飩攻めで、うどんと書いた看板こそ出てをらぬが、その盛んにマカロニを啜り込むことは大阪か四國へでも行つたやうな感じがする。畢竟は旅中の爽快な氣分に胃袋までが昂奮するのと、今一ッは喰物の類似から故國を偲ぶ心理狀態にも因るであらう。此の心理からして滿鮮在留の日本人も諸々方々で其土地に相應した日本流の名物を製らへ始めるが可からう。若し名物に美味ものなしなどと古臭いことを云ふものがあれば、其男はまだ修業の足らぬ旅行宗の外道である。實を言へば名物も人物も同樣で、評判の食ものと評判の男に碌なものはない。

七　所謂洋行

品川彌次郎と云ふ人は九段坂上の自邸に苦談樓などと名を付けて國事を憂ふる傍常に後進に吉田松陰を説き聽かせた至極眞面目な人であつたが、その名の通り彌次喜多氣分もあつたものと見えて、眞面目なる半面には極めて滑稽趣味に富んで、特に狂歌などはお手のものであつた。彌次郎君獨逸留學中は不惑の身を以て、アーベーチェーを稽古されたものだ。その時或人への手紙の端に

『坊ちやんお國でアイウエオ、
親爺やアベセで旅の空。』

と云ふのを書付けて來たことがあるさうだ。實際洋行した者でないと此の味は分らぬが、中學へ行く息やら、小學通ひの孫のある身でも、一

第一の内殿宮ヤリムレク科斯翼

旦海外へ出てパタ臭い氣に觸れると妙に氣が若くなるものである。

一體洋行と云ふ言葉は何時頃から始まつたものであるか。私の親父は洋行とまでは行かぬが、維新前に藩の御用とやらで上海まで行つた。其當時彼地で撮影た寫眞を見るとフロックコート然たる洋服に短劍を持つてゐる。其時分は上海をジョウカイ、北京をホクキンと呼んだもので、巴里もパリスと云はなければ承知しなかつたものだ。併し其後の五十年に洋行と云ふ言葉の意義がどれほど變つたかと云ふと、左程變化もせぬやうである。洋行歸りと云ふ言葉が今日尙一ッの社會語として有用に存在してゐる通り、洋行と云ふことは大正五年の今日でも尙大に意味を持つてゐる。昔の洋行は實際に皮膚まで——或者は魂までも——取換へて來るやうに思はれたのと、今の洋行は白い頭を白毛染をして黑い頭に變へる位にしか思はれぬだけの相違は

あるにしても、洋行と云ふことに價値を認め洋行歸りを買被るに至つては五十年來一日の進歩もない。

或る華族さんで却々物の分つた人があつた。今までに三四度洋行を遊ばした。此人の癖は何時如何なる場合でも決して土産物といふものを持つて歸つたことがない。そこで或時此人の洋行の門出に奥様が『御前、今度はお歸りにお土産物を願ひます、宅の者へは兎も角も御親類へは是非』と言ひ出すと、此人尋常の凡御前ではなく、鞄を弄つてゐた手を止めて『馬鹿、乃公は西洋へ小便を垂れに行くんだ、土産物を買ひに行くんぢやナイ』と一喝された。

此人は實は堂上華族で今は故人となられたが、舊華族にも時には面白い男がある。大正青年の洋行觀は西洋へ小便をしに行く位の氣でありたい。故田口鼎軒君の極めて稀な俳句の中に『小便の音も隅田の月夜かな』といふのがあるが、戰後は一つ獨逸にでも出かけてライン河畔の月夜に、ジャー〳〵と小便をしながら獨逸の今後をトするも面白いではないか。八月の中頃には貴族院の華族樣やら非華族樣數名が露都訪問に出かけられるさうで、目下送別留別のお仕度最中のやうであるが、土産黨か小便黨か、私は少からぬ興味を是等諸君の上に寄せてゐるものである。

洋行と云つて何程の面倒なことがあらう。佐々友房翁であつたか、巴里の旅宿で葡萄酒が飲みたいので、葡萄牙と云ふ字から思ひつき牙の一字を省いてボルト〳〵と叫んで飲む眞似をしたら、給仕人が畏まつてボルトワインを捧げて來たとは、確に翁の自慢話であつた。或る畫伯の風來山人全然啞の旅行に巴里の公園の夕まぐれ、「若し若し」と背後から呼ぶ聲に振向けば、白粉臭い化性の者らしきに、流石は巴里

の女、日本の言葉も知り居ると嬉しくなり、喜多八よろしくの一夜を過して、さて翌日日本人に其事を話せば「若し若し」はモッシュ〳〵と分つて、西洋の旅もヤハリ彌次喜多式に限ると愈決め込んださうである。

八奥の細道

元祿二年と云へば今より二百廿七年前である、今日でさへズー〳〵の奥州へ紙衣浴衣雨具筆墨だけの必要品を携へ所謂一笠一簑の輕裝で飄然江戸を立出でた芭蕉翁の旅行は、その風雅を追懷する前に寧ろ其冒險を歎賞せざるを得ぬ。その旅行記たる『奥の細道』は、今日の活版刷にすれば片々たる一小冊子に過ぎぬが、交通不便といふよりも

寧ろ蠻地へ分け入るやうな此の困難な旅行は、天地自然に對する愛着と文藝に對する忠實な心がなくてどうして決行されようか。專門家の說によると芭蕉翁の俳句が熟して來たのは『奥の細道』以後であると云ふが、さもありなんと思ふ。何事にかけても古人の今人に比して眞劍であつたことは敬服に堪へぬが、遊樂本位の旅行までが眞劍であるのは驚く。

歌人は坐ながらにして名所を知るといふが、こんなことを言出した奴は餘程の無性者か左なくば病身者に違ひない。山水に應接し風月を友とする氣分がなければ、文人たる本質に於て缺くる所があると言つても可からう。此點に於て私は蘇峰君に七十八日遊記があり三叉君に南國記があることを多とするものである。惜いことには愛山君には山水の雅懷がなく、風月の餘裕がないやうに思はれる。今の文人

としての旅行家は先づ露伴博士を推さずばなるまい。試みに博士の編著に係る『掌中山水』の序を讀んで見よう、泉聲清風一時に到るの概がある。

『三伏の炎暑、たゝ山水以てこれをわするべし。千仞の峙つ、萬里の流るゝ、振衣濯足、心すなはち天漢に遊ばんとす。また何ぞ爍金灼石の熱をおもはんや。……此の時に當つて古人の文の山水を記するものを讀むに、岱華眼前に生じ、江淮心頭に上る、また賴つて以て松籟泉聲一味の涼を得べきなり。』

旅行と讀書との三昧に入つたものでなくては、此文は書けぬ。私は僧萬里の詩集『梅花無盡藏』が何んとなく好きであるが、古人の旅行家としては儒者よりは僧侶、僧侶よりは俳人がヨリ大旅行を爲してをるやうに思はれる。山陽も隨分歩いてゐるが近畿と九州を主としたもので東北には全然足が及んでをらぬ。が併し志賀矧川君が自分は耶馬溪と吾妻川を二日の内に踏破したと云つて『當年賴叟眼如豆』とお得意の詩で罵倒されてるのは、假令一時の洒落にしても甚だ面白くない。山陽時代の交通狀態と廣軌鐵道論の熾な今日とが如何して同一に見做されようか。『東西遊記』の橘南谿とか『漫遊文草』の澤元愷などは孰れも第一流の旅行家ではあるが、竟に六十餘州に足跡遍ねき大淀三千風には遠く及ばぬ。三千風まで行かぬとも芭蕉や宗祇それから紀行文こそないが蕪村なども可なり歩いてをる。斯かる上からして私は何時か東國奥州を廻つた宗祇の『廻國雜記』、江戸から伊勢詣をして京都へ出た嵐雪の『裝遊稿』、才麿の『椎の葉』などの旅行上の比較研究がして見たいと思うてをる。之を要するに過去に於ける日本の旅行の天下は俳人に依つて占められた、此の意味に於て

私は代表的に『奥の細道』を珍重する。

今日の所謂文士の中で紀行文家と稱すべきは花袋、水哉、麗水、桂月などの諸君があるが、實際に脚と文と同一程度に働いてをるのは碧梧桐君であらう。水哉君が今度南洋方面を開拓されたのは最も喜ばしい。麗水君の山東に孔子の墓を訪はれたのも面白かつた。文人とか文士とか名の付いて幸ひに旅行趣味を有する連中は、膝栗毛に馬力をかけて古人に敗けぬ覺悟が肝心である。

九　アルプと雪山

六年前の夏ゼネヴァに着いた其日の夕方、レマン湖から落ちる淡藍色の水の畔に立つて東南の空際に淡墨のやうなモン・ブランを眺めた

景色を私は今でも忘れることが出來ぬ。西洋の景色にも確に特色があつて中々に棄て難い所が多い。私は處々方々で水も可なりに見たがアンナ綺麗な水が何處にあらうか、それに西洋の水になくてならぬ鵠が流れを押しては上り、押されては流される風情は、どうやら隅田川の都鳥とやらより遙に嫻麗なやうに思はれる。伏して脚下に此水を臨み、仰いで雲際遙にアルプ山系の繪の如きを望む時には誰人も皆アルプ登山に心の動かぬものはあるまい、而も私は當時時日の不足と懐中の具合とでアルプ登りを斷念したのは殘念であつた。

日本人でアルプへ登つた人は少くあるまいが、その旅行記によつて最も振つてゐる者は吉田博畫伯と慶大教授鹿子木員信君とであらう。特に吉田畫伯がアルプの最も危險な名物である氷河の邊に踏入り、脚下の危險を忘れて其の奇拔な景物に魅せられた具合は、確に探檢的旅

行の三昧に入つた者である。私の知つた範圍に於ては日本人の試みた外國旅行中、氷河と氷原に戰慄すべき危險を冒した人が二人ある。其一人はアルプ登山中の氷河に於ける吉田畫伯で、他の一人は伊犂より大雪山への歸途氷原を渡渉した日野少佐强君である。只不思議なことは西洋人の有する一種の冒險心である、假へばアルプ山の氷河越の如きは年々少からぬ死傷や危害があるにも拘らず、男も女も敢て之れを試みて樂みとし誇りとするの狀は、到底我が富士登山の比ではない。現に登山のレコードを作ることが彼等の誇りで、紐育のボンド君と云ふのがモン・ブランを九時間に登攀したのが今ではレコードになつてをる。チロル・アルプ卽ち目下伊墺の間に爭奪の標的となつてをるアルプ越を試みたのは鹿子木敎授である。

西方のアルプへ對抗すべきは東方のヒマラヤを措いて他にはない。

ヒマラヤ山脈四十八大峯がいづれも標高に於て士の二倍なるを見ても、其雄姿が想像される。山高きが故に貴からずと古人は言へど山の低きは愈値打なし。所謂ダーヂリン・ヒマラヤ鐵道が世界の大高嶽を前に控へながら軌の僅に二呎の最小鐵道なるは一種の滑稽を感せざるを得ない。光瑞伯であつたか關露香君であつたか其印度紀行によると、此の豆汽車は羊腸の坂路を幾曲折して或はZの字となり或はS形となり、OUNの字形を畫きながら、ダーヂリンの手前などは、二十五哩の間に七千呎の高度を上り行く次第であるさうだ。香港のピークでさへも登る時の心持は愉快であるから、ダーヂリン近くの此の上り汽車は定めし壯快な者であらう。愈ダーヂリンへ着いた翌曉ヒマラヤ連峯に旭日のさす雄大な光景を眺めては身の人寰に在ることを忘れて、山を閉す霧の海が先づ紫の面布と變じ次に紅の海と變ず

る大自然の美觀に魅せられるさうである。富士の御來迎も有難いに相違ないが、亞細亞人の誇りとしては是非共一度ダーヂリンにヒマラヤ連峯を仰ぎ古人の言草ではないが、大雪山の頂に衣を振ひ、ブラマプトラの流れに足を濯ひたいものである。

デ私は西洋人のために殆ど夏季の遊び場のやうに見做されてゐるアルプと世界の如何なる探檢家も容易に登攀を企てぬヒマラヤとは、磨いた玉と磨かぬ玉、加工したダイヤモンドと切出せるまゝの金剛石との相違の樣な感じを禁じ得ぬ。繪の樣なゼネヴァ湖に遊んだ佳人才子にも加工したダイヤモンドは直に之を我物とすることが出來るが、未だ山から切出さぬ金剛石は只壯志と鐵脚とのみが之を探求し得る、ヒマラヤ山脈横斷の容易ならぬ所以であらう。アルプは女體山とマラヤは男體山か。

一〇 朝鮮耶馬溪

朝鮮耶馬溪――僭越ながら之は私が勝手に附けた名である。朝鮮は江原道なる日本海に臨んだ金剛山の奇勝を天下に紹介せん爲である。然るに此山は頗る異名に富み、皆骨、涅槃、楓嶽、恍怛といふ。皆骨とは怪巖奇石皆骨を爲すの謂で、即ち內地なる豐後の耶馬溪の巖容石貌の呈露せざるなきと同一である。或る他の解釋によると冬は落葉し盡して山骨稜々たる處から皆骨の稱があると云ふが、此解釋では金剛山の特色が見えぬ、冬になつて落葉の景色を云へば何の山も同じことである。尤も金剛山は四季に其名稱を異にし、春は金剛山、夏は蓬萊山秋は滿山の紅葉に因んで楓嶽、冬は皆骨と云ふことにも說かれてゐる。

しかも内地人に最も能く金剛山の實景を想像させるには、朝鮮耶馬溪の名が一番だと私は思ふ。西洋人の間にはダイヤモンド、マウンテンで追々知られて行く。

朝鮮は禿山ばかりと早合點をしてはならぬ、流石に江原道には老杉古檜の天に參する深山高嶽が少くない。卽ち韓半島の脊梁を成してをる白頭山の支脈が南に走つて所謂一萬三千峯の大山系を江原道に形造つて日本海に迫つてをる。併しながら金剛山の特色は鬱林でもなく老樹でもなく、其晩秋の候、奇嵒峭壁の間に紅葉の相映じ、飛瀑翠巖碧潭藍を濫へる趣である。山陽が耶馬溪を敍する內に『山、水を得ざれば生動せず、石、樹を得ざれば蒼潤ならず』と云ひ、『群峯水を夾みて攢竦すること春笋の矗立するが如し』と云つたのは皆移して金剛山の山水を敍するに足ると思ふ。山中に百餘の寺刹があり、その最も古き楡岾寺は耶馬溪中の羅漢寺にも相當しよう。丁度其處此處の巖面に佛像の刻んであるなどは、山陽に言はすれば『卽ち人工のみ』として多く顧みまい。言ふ迄もなく金剛山は外金剛、內金剛の二つに分れてをるが、勝景は多く前者に在ると云はれる。斯う書いてくると如何にも私は一遊も再遊も試みたやうであるが、實は未だ金剛山の探勝はやつたことはない。先年新羅の舊都慶州に遊んで一千年前の古文物に親み背後の山脊に佛國寺を訪うて朝鮮の山容水色に戀々したのであるが、金剛山にも一兩年內に遊びに行きたいと思うてをる。ゴルドン夫人といふ英國の女が大正三年に金剛山に三度も登山し、獨逸の山嶽會員クリューゲルといふ人などは三度も探賞して世界一の奇景と讃美したと云ふに至つては、遊意勃々たらざるを得ぬ。蘇峰君も一遊されたさうであるが、朝鮮耶馬溪の記は差しづめ君が山水眼と翰管と

に賴らずばなるまい。

一體朝鮮の山水には特色がある、水は暫く別として山だけで云ふと、朝鮮の山は決して支那の山でもなく、又勿論日本の山でもない。流石に山陽には畫眼があつたから、峯勢石皴董巨刻意の圖の如しとか、槎牙瘦古皆倪黃の筆法なりなどと說明してをる。處が悲しいことには私には畫眼がない、隨つて支那朝鮮及び日本の山水の相違を畫論上から立證することは私には不可能であるが、若し極めて俗な比喩を以て言ひ表はすならば、朝鮮の山は骨、支那の山は皮、そして日本の山は肉とでも云ひたいやうな氣がする。それにつけても思ふことは朝鮮の趣味ある地理的記述が我國に欲しい。大日本地名辭書も琉球と樺太は出來たが朝鮮はまだ出來ぬ。今日では成島鷲村君編著の『朝鮮名勝詩選』などは新しく出來た名勝誌としての便利な書である。

二　洞庭湖の篝

私は外國旅行に出かける時は、殆ど常例のやうに陸放翁の入蜀記を手鞄の底へ入れて行くことに定てをる。右を見ても左を見ても横文字ばかりの土地へ行つて客舍のつれ〴〵や長い汽車の旅中などに漢字を目に入れることは丁度書見を續けた後で精綺水を目に注すのと同樣な感じである。隨つて斯る際の漢書は西洋紙に活版刷のものでは承知が出來ぬ、少くとも和紙に木版刷のものでなくてはならぬ。夫には極小本の入蜀記が丁度都合が好く、文章も平易で苦心もなく讀め、而も亞細亞流の嶮山巨水の態が眼前に髣髴して來る。斯ういふ偶然の緣からして私は支那の諸省中四川が最も好きであり、何時かは蜀の

遊をして見たいものと思ひながら、年を重ねてをるが、これ等が所謂望蜀の歎とでも言ふのであらうか。

何が壯觀であると云つても洞庭湖上の大筏の如きはなからう。入蜀記の一節を抄錄すると『拋大江遇一木栰、廣十餘丈、長五十餘丈、上有三四十家、妻子鷄犬臼碓皆具、中爲阡陌相往來、亦有神祠、素所未覩也、舟人云、此尙小者耳、大者於栰上舖土作蔬圃、或作酒肆』と、何たる大仕掛の筏であらうか。日本では吉野川の花筏など云つて、筏と云へば纖弱な感じがするが、鷄犬の聲が兒童の聲と交り、野菜畑もあり、酒屋も豆腐屋も其處此處にある水上の小邑のやうな大筏が、湖面四萬八千頃(約一六七方里)の洞庭湖に浮んでゐる有樣は想像するだも雄大な景ではないか。風物の大を以てしては吾等は決して支那を馬鹿にすることは出來ぬ。

流石は南船北馬と云ふ熟字の創造された支那だけあつて、民船蓬船

の名だけでも數十百通りもある。岳州より到るものは長船又は鏟子といひ、湘水よりするものは沙窩子又は萬林紅と云ふやうに、江水の異なるに因つて船にも種々雜多の名がある。此頃のやうに廣東が今にも兵火相交はらんとする大騷ぎであると、廣東名物の畫舫も安否如何ものであらうか。宜昌邊りでは確か警護の官兵共が乘込む小舟にまで紅船といふ名を付けてをる。私は先年友人の許で清版の『揚州畫舫錄』といふのを見たことがあるが、此の名だけでも人を浮々させる、土地が土地だけに唐團扇でも持つた畫舫中の細腰の美人を想像させるではないか。兩國の川開きの浮世繪で大花火を向ふに廻して屋臺船に藝者の立つてゐる姿よりも私は寧ろ揚州の畫舫を想像したい。古い所では范石湖の『吳船錄』、新しいものでは王穉登の『雨航記』などがあるがまだ讀んだことはない。長江を溯つて蜀へ入る者には

竹添井々翁の『棧雲峽雨日記』を第一に推さずばなるまい。内藤湖南君にも十五六年前に『燕山楚水』の著作がある。

一體日本人として不思議なのは支那に旅行する人の割合に少いことである。政治上から見て肝腎なことは勿論であるが、旅行學上から見ても日本人は先づ南北支那を踏破すべきである。山水の凡ならざるは勿論、その民風習俗の社會的觀察は旅行家に取つて盡きざる興味があるに相違ない。私はスタール博士のやうな出で立ちで、支那服を着支那沓を穿いて支那人流に客棧に泊り込み、手鼻もかみ肌ぬぎもして、到る處で市井の間に出沒して見たいと思ふ。官僚中には珍らしく茶人氣のある林權助君は英國でなければ支那へ行くといふ希望でとう〳〵支那へ行くことになつたのは嬉しい。抑も顏付からして支那向であるを幸ひに、君の如きは一度南北支那を廻られたら好からう。

蜀道の難は天に上るよりも難しと云はれたのは昔の事、今は砲艦でさへ溯航するから、お互亞細亞的面相の所有主は振つて一つ蜀の都にでも蔡鍔君を訪問ねて、歸り途に洞庭へ出て大筏の上で尿でもブッ放さうではないか。

一二　南洋の珍果

八月の『太陽』の口繪に南洋の美果ドリヤンが、樹に生つてゐる立派な三色版畫が載せてある。これは恐らく坪谷水哉君の南洋土產の一に相違あるまい。實際南洋到る處で四時間斷なく味ふことの出來る果物の、特種な香氣と風味とに想ひ到ると、一度でも南洋へ遊んだものには垂涎千丈である。ドリヤンが美味いか、マンゴーが結構である、

か、マンゴスタンが第一等であるかの品隲は暫らく南洋通仲間の專門批評に任すとして、何分にも大小十數種の珍果が一卓上に列べられると初めて南洋へ行つた日本人は誰れでも呆然たらざるを得ぬ。

私が新嘉坡に寄港した時は、未だ長田秋濤君が新嘉坡郊外のグレンジロードに夫人と一緒に洒落た別莊風の一軒屋を借込んで名ばかりの護謨園監督に詩人風の生活を送つてゐた時分であつた。私は椰子林を一通り見了つて、その儘自動車を秋濤君の寓に驅ると、今日は特別な御馳走は何にもないが、南洋の珍果十數種を此通り集めて置いたから片ッ端から喰つて見ろと云ふ。旅行は或意味に於て山水と飲食だと心得てをる私は早速マンゴーを取上げてその薄い果皮を剝き橙赤色の軟かい實を一口喰つて見ると、味を感じる前に一種青臭いやうな臭氣を感じて少からず辟易した。其處には尙巨大なカノーンがある、

ドリヤンがある、椰子の實がある、モロッコー(木瓜)がある、形は柿のやうで淡黑いマンゴスタンがある。マンゴスタンは珍果中の珍果で、故ヴイクトリヤ女王が毎年一度一籠三十磅を投じて取寄せられたほどの美果である。これは私も其の前郵船の濠洲航路の食卓で喰べたことがあるので、前の臭果の埋合せに之を一ッ取上げた。マンゴスタンの喰べやうは丁度半熟玉子の西洋風の喰べ方と同樣で、利刀で上半を切取ると五六の純白な實が露出する、その實を舌に載せると淡雪のやうに溶けて、上品な甘味と酸味とが何時までも殘る。

今一ッ忘れ難いのは椰子の實の液汁である。或る西洋人の書には之を『天然の三鞭酒』と云つてあつたやうに覺えるが、實際さうである。アノ大きな硬い樹皮の上部に成るべく二ッ孔をあけて其一ッの孔から液汁を取ると、一顆の椰子の實から七八合は採れる。幾分鹽味

を含んだ甘汁で、コップに一杯や二杯は誰れでも直き平げて了ふ。トッヂーと云ふ椰子酒のことも聞いてはをるが、まだ味はつたことはない。新嘉坡のベー・ヴュー・ホテルで椰子の濱風に吹かれながら籐椅子に凭つてトッヂー酒を傾けるも可からうが、私は寧ろアノ新嘉坡の日本宿屋碩田館のダ、ッ廣い二階で浴衣がけのまゝ、土人の首のやうな椰子の實二三顆を側に置いて、アノ甘い液汁を飽くほど飲んで見たい。銀座あたりで麥藥の管から微溫い人造飲料をチュー〳〵やる連中は、一ッ高襟振りを南洋化して、馬來半島か爪哇邊に珍果甘汁を味はひに行つてはどうだ。

一三　駕籠と草鞋

駕籠と草鞋は旅行學上我國の特色のやうに思はれる。處が昔は我國では此の二ッ丈が旅行上の穿物であり、旅中の交通機關であつて、他に別に比較すべき對照物がなかつた爲めに、古人は却て駕籠と草鞋の實用的にして且趣味を兼ねたものであることに氣付いてをらぬ。一體旅中の乘物として駕籠ほど便利で且風雅なものが何處にあらうか。道中の乘物としては田舍馬か駕籠かに限ると私は思ふ。併し馬の方は多少とも熟練も入り危險も伴ふから竟に駕籠の坐睡りも出來、坐らず眺望に專心し得るの樂さ加減には及ばぬ。西洋の登山仕組には往々ケーブルカーを用ひたり、左なくば平坦な道を切開いて自動車を奔らせる工夫をやるが、爽快な氣分はあつても趣味や雅致には乏しい、香港で盛んに用ひられてをる籐椅子の轎も、實地に乘つて見ると自らその餘りに傲然たる態度を感じて決して愉快なるものではない。元來支

那流の轎もその乘心地において又轎夫の擔ぎ具合に於て、到底我が駕籠と雲助とに及ばぬ。

先年私は臺灣に遊んだ時蕃地巡りをやつて、一溪を隔てゝアタイヤル族(生蕃)の蕃地と相對する角板山の警務所に一泊したことがあるが、其際山麓から可なりに遠くて高い山腹までの道を藍と紅とで彩つた轎に乘つて登つた。歌こそ謠はぬが息杖に力を入れて足拍子面白く胸突き坂のやうな可なりの急勾配を樂々と行く態は、我が箱根あたりの駕籠舁と略同樣であつたが、臺灣山地の轎夫は支那內地のそれに比して餘程熟練したものだと云ふことを後で聞いた。只此處では轎夫六人が一組で、前後二人宛に二人が手代りである。亞弗利加の沙漠を行くにも所謂吊床人夫がある。雲突くばかりの黑坊が八人一組になつて四人宛交代して前二人後二人で擔ぐのである。これ亦以て其便

否竟に二人本位の我駕籠に及ばぬ。矢釜しい人道論は暫らく別として我國の道中旅行には駕籠、山登りには山駕籠を保存したいものである。

我帝大出身の工學士か理學士であつたと記憶するが、瑞西からアルプ登りをやるのに草鞋四十足を用意して登山した男がある、惜いことには此の好漢の名を逸した。百餘年前の大旅行家澤元愷は其著『漫遊文草』の中に旅の用意を敍して『韈は必ず底の無きものを用ひよ、底あるものは足を病む、草鞋は搗くを厭はず、然らざれば足を嚙む、一日嚙まるれば數日の累を爲す。この二つの物は游子の宜しく戒むべき所である』と書いてをる。我國大旅行家の一人である神保小虎博士は『日本流のワラヂカケの足袋は輕くして便なれども刺多き草の中にては傷を爲すことを覺悟せざるべからず』と云はれてゐるが、濠洲

の仙人掌林の中でも行くなら格別、草鞋に足袋に脚袢の出立ちなら大概の叢中は自由自在である。西伯利亞のトウンドラ(森林苔澤地)地帶でも踏査するには太股まで來るやうな露西亞風の長靴も可からうが、何分にも足の運びの重いには閉口である。現に日露戰爭の時にも日本軍では或場合草鞋を用ひた、露軍が歩兵まで長靴の重いのを穿てゐるのと好對照であつた。只草鞋の絶對禁物は寒氣である、氷點下廿度位の寒地で草鞋に脚袢の出立ちでは一里も行かぬ内に凍傷で斃れるだらう。斯う考へて來ると駕籠も草鞋も脚袢も足袋も、皆日本内地の地理と氣候に適した日本特有の旅具と心得て可い。草鞋にも麻で作つたもの、棕梠の皮で編んだもの、又は檻褸布で編んだものなどがある。檻褸布で編んだ草鞋は日露戰爭中滿洲で用ひた者の實驗によると、一旦水につかつたが最後、翌日は鐵板のやうに觥鉾張つて到底使用に堪へぬと云ふことである。やはり草鞋は藁地に限る。

一四　八景の勝

所謂近江八景の撰が何時何人によつて出來たものであるかは、三四古書の記錄いづれも區々にして、今日まで一定の說がない。唯戰國時代から江戸時代までの間に作られたものであることだけは明かださうだ。併し支那の所謂瀟湘八景が我國に知れ渡つて居たことは恐らく古いことであらうが、而も之を輸入して置きながら斯くも晩年に及んで漸く之を擬し得たことを想ふと、所謂武門武士なるものゝ無風流であつたことやら、戰國時代の兵亂に忙殺されてゐたことなどが明かに想像されるではないか。それにしても洞庭湖南の湘江瀟水邊の絶

佳な風光に擬して、我が海内第一の琵琶湖の風光を詩化せんとしたのは近衛某なる歌人の創作にしても、又は圓光寺某なる坊さんの撰であつたにしても、兎も角も我國の風景史上に一新例を開いたものである。現に支那では瀟湘八景の創作に倣つて、宋以後に於て西湖十景とか燕京八景とか云ふものが處々方々に出來たやうに、日本でも近江八景に基いて南都八景金澤八景などが早くから撰定された。只金澤八景なるものが一も二もなく支那の瀟湘八景の名稱そのまゝを移し來つて名に依つて景を強ひんとする嫌ひあるは餘りに模倣的で遺憾千萬である。

朝鮮にも滿洲にも近頃日本人によつて新八景が撰定されたのは喜ばしい。卽ち朝鮮は

平壤八景

永明寺の晩鐘　箕子陵の晴嵐
牡丹臺の秋月　船橋里の夕照
大同江の歸帆　普通江の落雁
松樹山の暮雪　義州路の夜雨

又滿洲では

安奉線八景

安東縣の歸帆　五龍背の奇峰
鷄冠山の杜鵑　秋木莊の牧童
草河口の殘月　連山關の白雲
釣魚臺の巖壁　橋頭里の牛車

と云ふのであるが、私は此の兩地を可なりに精知してゐるだけに、之に對して特に興味を感じる。この他處々方々で邦人によつて新撰され

た其地々々の八景は決して尠くない。南支那なる大冶の如きも亦日本人の撰んだ八景がある。私は其半を記憶してゐて、他の半を想出す事が出來ぬ。即ち鳳嶺松風、雉山煙雨、東方覽勝、西塞懷古といふのだ。

井上圓了博士は化物の研究ばかりでなく、風光の探賞も却々に行屆いた人である。此人は到る處に奇拔な八景撰をやる。今私の記憶してゐるのでは、

能州八景

七尾の汽笛　中居の隧道
珠州の鹽山　南志見の盆踊
輪島の明月　七浦の斷巖
鉈打の驟雨　高濱の炎暑

北海道八景

大沼の晴嵐　輕川の夕照
余市の果林　小樽の汽笛
雷電の斷崖　利尻の岳雲
羽幌の夜雨　宗谷の秋月

と云ふので、東部北海道の八景は又別に撰ばれてある。名は忘れたが支那の文人で瀟湘八景以後處々方々に何々八景何々十景などと、凡山凡水にまで殊更に名を付けるのを憤慨して、「今時十室之邑、三里之城、五畝之園、以及琳宮梵宇、靡不有八景十景詩、可憎甚矣」と云つてゐるが、腐儒何をか知らんやで、斯んな憤慨は唐人の寢言として採るに足らぬ。私の考へでは名山大澤は固より可、假令一小景物にでも八景十景を撰定して、一向に差支ないと思ふ。蝸廬十歩の前庭にも又六疊敷の座敷にも天地の大を包容する悠々たる心境がなければ、天下の名山大澤を

愛賞することは出來ぬ。試みに私に東洋八景を撰ぶを容されたい。

ルネタの夕照（比律賓）　ヒマラヤの暮雪
洞庭の秋月　黑龍江の歸帆
關八州の晴嵐　臺南の夜雨
長白山の落雁　（？）の晩鐘

一五　福島將軍

日本へ持つて來られた馬で、永久に記念すべき馬があるとすれば、福島安正將軍の西伯利亞單騎旅行の馬と、旅順開城の際ステッセル將軍から乃木將軍に贈られた馬とであらう。日本で世界的旅行家を最も多く網羅してをる處は何處であるかと云へば、參謀本部である。その

參謀本部で最も多く旅行家を出した時代は何時であるかと云へば、福島將軍が參謀次長時代である。そして將軍自身は世界の各方面へ足跡の遍ねき點に於いて、恐らく我國での第一等の旅行家であらう。私は西伯利亞鐵道に乘つて幾度か西伯利亞を往來したが、その度毎に斯んなことを考へる、卽ち露西亞ともあらうものが日本の一軍人に騎馬で西伯利亞を通り拔けられたとあつては何分にも癪である、一つ鐵路千里を通じて縮地の術を西伯利亞に行つて驚かしてやらうと云ふのが西伯利亞鐵道敷設の動機ではあるまいかと。勿論これは一片のイリュージョンに過ぎぬが、少くとも久しき間只『氷雪の床』とのみ思はれてゐた西伯利亞に、明確な交通的基礎を拓いたものは、一に其功を福島將軍の單騎旅行に歸せずばなるまい。

最早二十五年の昔となつた、當年の福島少佐が四十歳の血氣盛りに

西伯利亞單騎横斷の壯圖を立てゝ孤鞍伯林を出立したのは明治二十五年の二月であつた。私は今手許に之れに關する記錄を持たぬから委しいことは書けぬが、確か烏拉爾を越えてオレンブルグ邊から一旦天山南路へ廻り、それから安爾泰を北へ越えて再び西伯利亞に出で、黑龍江をブラゴウエシチエンスクまで出で、それから大江を渡つて南へ齊々哈爾街道を通り、吉林寧古塔琿春を經て、遂に翌廿六年の六月に浦潮斯德に着かれたやうに記憶する。縱令騎馬でないにしても單身此大旅行をやることは、世界に於ける旅行上の記錄に於て十分優等な位置を占め得ると信ずる。特に二十五年前の西伯利亞、二十五年前の外蒙及北東滿洲の狀態は單にその行路上の危險だけでも到底今日想像の出來る程度のものではない。加ふるに彼は之を騎馬で通した、アノ强烈な寒氣の西伯利亞を騎馬で旅行し通したといふことが、尋常旅行

家の企及し能はぬ點である。意志の剛强と體軀の頑健とがなければ、アノ風雪堅氷の裡に馬背の人はとうの昔に凍死して了ふ譯である。イヤ彼には實際旅行に關して少からざる修養がある。高加索中央亞細亞、埃及、土耳其、波斯、阿拉比亞、印度、緬甸、暹羅、安南及支那は悉く彼の足跡を印した地域である。これ丈でも彼は優に第一流の兵要地理學者たる冠を戴くに十分である。

將軍は老來意氣尙壯で、その退職後廣く日本內地を騎馬又は腕車で二度までも巡遊された。雀百まで踊を忘れずと諺に言ふが、將軍の如きは所謂讀萬卷之書行萬里之路の人で、眞に天地を家とする人である。將軍は一種自己流の俗謠が大得意である。曾て其土耳其を謠つたものに『又かい好かぬと身を投げ出し「欲奪奪へ達丹、妾が身滅ぶる時は六國亂る」脅し文句ぢや動きやせぬ』。二十五年後君府の形勢は

二十五年前の彼の一俗謠に盡されてをるではないか。

若し今後國際旅行探檢家大會とでも云ふ者が巴里邊りに開かれるやうな場合があるとすれば、我國は差詰め代表者として福島大將を送らずばなるまい。國家として彼を有することは誇りであるが、第二の彼が未だに見付からぬことは國家の憂である。旅行と探檢の氣分は今少し青年の間に奬勵せねばならぬ。

一六　島巡り

『絶勝始疑天有私、丹青難寫況文詞、半生憐我煙霞癖、未識溪山若個奇』とはアノ江戸ッ兒の粋人、成島柳北翁が小豆島の寒霞溪の絶勝に驚いた時の句である。そして神馳卽ち寒霞溪の勝は一歩に一景なりと書いてをる。誰であつたか或る文人は寒霞溪の景勝は耶馬溪のそれに優ると云つてをる。芭蕉翁の『初時雨猿も小簑をほしげなり』は此の溪地での作だと云はれてをるが、實際今でも數千匹の猿が居るさうである。

處で『紅楓如錦映青松』と吟ぜられた小豆島や、『風の塒浮巢の廊やいつくしま』と咏まれた嚴島などは繪のやうな島である。私は島廻りをやるには今少し男性的な謂はゞ島の特色を備へた島々を巡遊して見たい氣がする。平家物語を取つて硫黄島の條を見ると、

『自から人はあれど衣裳なければ此の土の人にも似ず、言ふ詞をば聞き知らず、身には頻に毛生ひつゝ色黑うして牛の如し、……島の中には高き山あり、長へに火燃え硫黄と云ふもの充ち滿てり、……雷常に鳴り上り鳴り下り麓には雨繁し。』

硫黄島にしても鬼界が島にしても、勿論今はこれほどでもあるまいが、荒海の中に立つてをる孤島の樣は、尙平語時代の趣が見られよう。併し小笠原島には鳶色の皮膚を持つて體格雄偉なカナカ婦人が日本服を着て日本臣民で御座ると威張つてをる今日、小笠原島は勿論、大島にしても八丈島にしても、今では餘程都の風が吹荒してゐるらしい。尤も帆船時代と違つて今日では八丈島にしても横濱から十六七時間の處である。それでも未だ中々舊風俗が殘つてゐて、潮染を着た若い娘ッ子が牛に横乘して狹い道をやつて來るなどは、島の風俗として最も嬉しい。横濱から二晝夜と一日かゝる小笠原島は、蛇も蛙も蚤も虱も居らぬことが此の島の特色であつたが、今だに一輛の人力車さへないさうであるから、恐らく蚤や虱もまだ輸入されまい。こんな島に遊んで海岸へでも出て、沙原で正覺坊の卵でも掘出して惡物喰ひをして見

たいものだ。『大島に蠅と牛糞なかりせば不寒不熱の極樂の里』とは例の諧謔博士圓了先生の狂歌であるが、太島に限らず南方の島には皆牛が共通の名物である。

南海の島々で私の好きなものは海龜と信天翁である。遠洋の航海者から『沖の太夫』といふ名を貰つてゐる信天翁は、汽船や大帆船の影さへ見れば十數時間は愚か、往々數日間も追かけて來ることがある。名の通り餘程の鈍物で、容易に捕獲られる。鳥島は卽ち此の信天翁の產卵期に群栖する洋上の浮巢のやうな場所であつたのを、近年は利のみを知つて自然を愛することを知らぬ商人共が、アノ白い羽毛と白い糞とを採取に出かける。不活潑なる都人士諸君も、郊外の人造沙風呂などに納まり返らずに、南海の濱邊で海水浴でもやつて、沙岸に信天翁の群に伍して、暫らく人寰を遠ざかるのも亦男らしい興味を感ずる所

以ではないか。

小波山人は近頃のことであらうか佐渡へ遊んだ一句がある『夢涼し夜を閉さぬ國にして』と、實に島の誇りは盗人の居らぬことである、飽まで月のさし込むに任せ、風の入るに委す、況や旅人の氣樂さをやだ。若し南海の島嶼に遊ばずとせば、佐渡や隱岐の島々に尊き史蹟を探るも亦面白からう。佐渡の如きは歴史を離れて、單純な風景觀から云つても寔に堂々たる風景である。廻らすに日本海の荒海があり、聳ゆる翠巒連峰があつて、瀲灩たる加茂湖上に其影を投じてをる。隱岐にも亦全島第一の高峰大滿寺山があつて、隱岐固有の俗謠ドッサリ節の内に詩趣を添へてをるではないか。

『大仙山から隱岐の國見れば、
島が四島に大滿寺』

所謂ドッサリ節の一である。

『嶋と云ふ字は山邊に鳥よ、
鳥が飛んでも山殘る』

所謂大島節の一である。

一七　山

醉古堂劍掃に妙味いことが言つてある『山水を觀るは書を讀むが如し、其の見趣の高下に隨ふ』と、實際さうだ。同じく山に入り水を尋ねるにしても好んで凡山俗水に入つて妙な眞似をしてゐるのは、探偵ものや似而文學を耽讀する手合と同樣、俱に山水を談ずべき資格はない。古人は『春山は笑ふが如く、夏山は滴るが如く、秋山は粧ふが如く、

冬山は眠るが如し』と云つて居るが、これは勿論山麓から眺めた山の容で登山は概して夏が可い。

同じく一つの山に登るにしても地質學者は矢鱈に岩質や紀層ばかりを見て、之を看過するものを愚者のやうに罵る。植物學者は高山植物の種々にのみ目を注いで、亦岸角溪流を見るの餘裕を持たぬ。そして是等の手合は動もすれば山水の勝景を嘆賞する者を「遊惰性の風流人」などと嘲る癖がある。併しそれでは藝術家や詩人などの天地がなくなる。直に金槌を以て岩の角を碎きたがる地質學者にも登山の權利があるやうに、山中の懸崖や溪流に會うて、直に畫筆やキャメラを取出す畫家や寫眞道樂の男にも登山趣味を十分發揮する權利はある。要するに私は登山趣味をさう窮屈にする必要はないと思ふ。又必ずしも人跡未到の深山高嶽のみを選ぶ必要もないと思ふ。要はア

ノ冷爽な嵐氣と探檢的氣分とを味ひに行くので、その副產物として學術的實查や採集や詩歌寫眞の類を獲來れば則ちそれで可い。

甲武信山中での登山學生の慘事は如何にも同情に堪へぬことである。特に彼等が相互の友情と克己とは死者の最期にも生存者の奮鬪にも十分に認められて感激に堪へぬ。仁者は山を愛すと言ふが、高潔な心情の者でなくては登山趣味を感ずることは出來ぬ。不甲斐ない青年や利己主義の壯者が殖え行く今の世に、さても貴ぶべき犧牲である。先年も木曾の駒ケ嶽や槍ケ嶽に學生の凍死事件があつたことを想ひ合はせると登山に關する相當な指導機關若くは團體が欲しいものである。瑞西あたりではアルプ登山に關してシーズンに入ると氣象を報じ天候を知らしむる方法が講ぜられ、又諸種の諮詢機關が出來てをる。我國でも山岳會あたりが主動者になつて是等の新施設に任

せられたいものである。

尙一ッの新希望は高山生活である。登山も勿論可いが單に登つて下りるばかりでなく、高山上の生活を試みる風を流行らせたいものである。佛蘭西の或お醫者で多數の患者をアルプ山上へ連れて行つて、眞裸にさせて裸體保健法といふのをアノ高山頂でやつた奇拔な男がある。之ほど奇拔な方法でなくとも大天幕と釣床と毛布と米味噌梅干等の必要品を用意して、團體組織で一週間なり十日なり高山生活の經驗を試みたいものである。斯うして自然に山中に於ける濃霧や豪雨や急病や湯水の準備などに就て、得難き實驗を積み得たならば、登山の鍛練は自から出來上るであらう。一體東京などは倫敦や巴里や或は華盛頓やペトログラードなどに比べて見ると、市街から山影を望むことの多く出來る方で、富士見町と云ふ町が東京市中に三ッ四ッあるのを見ても分る。況や京、大阪に至りては一歩踏み出せば山である。都人士すら常に山と斯く親しみのある以上、登山は我同胞の自然に養はれて來た趣味であらねばならぬ。因に記す前稿中アルプ登りに草鞋四十足を用意して登つた男と云ふのは、今の農科大學教授池野成一郎博士であつた。

一八　比賓律の食事

數年前比律賓に遊んだ時に如何なる時でも幾分志士氣取りの失せない私は、或朝マニラ灣内航行の乘合小蒸氣船に投じて、對岸のキャビテ・ビエホ(舊キャビテ)に向つた。アギナルド邸を訪問して彼が當年の意氣あるやなしやを想望しようと云ふのだ。訪ねた其日は留守であ

つたが、家人は非常に私を歡迎して呉れて早速晝飯の食卓に着かせて呉れた。大卓を圍んで家族一同列んだが、アギナルド君の母人だといふ老婦人が、流石に一番上品であつた。愈食事が始まると驚いたのはどうやら皆なが手攫みでやらかす容子である。私の前にこそ外國の客で不慣だらうと云ふので、ホンの形式的にホークとスプーンとが置かれたが、それでもナイフは無いのだ。見ると西洋流の楕圓形の大皿に、丁度鯉のやうな大きな煮肴がある、その脇には圓形の大皿に米の飯が堆く盛られてある。その他に尙三四種ほど何か見える。私の隣に坐つたアギナルド君の甥だといふ壯者が、サアお食りなさいと云ひながら、先生猿臂を伸ばしたと思ふと、その米の飯の山の角を五本の指で鈎き取つて、自分の前の西洋皿へ置き、又私に會釋しながら例の煮肴へ五本の指をさも自然のホークのやうに立てたかと思ふと、魚肉の一片

比律賓の婦人

を巧に――巧にといふと其肴の肉に幾分煮付けた汁までも含ませて、自分の西洋皿の飯の側に同居させた。今度は私がやらなければ老婦人始め一同が躊躇してゐる樣が見えるので、愈決心した。此際ホークやスプーンを取上ぐることは、勿論客として採るべき作法ではない。イヤ親讓りの此箸の方が結構ですなどと云つて、遠足や遊山の場合は勿論、どうかすると立食の場合でさへ御免蒙る日本人だ、此場合躊躇せずに主人に倣ふべしだと決心して、生のまゝなる五本の箸を飯の山へ持つて行つて、一角を攫んで之を皿に移したまでは好かつたが、指に着いた御飯粒がどうにも巧く落ちない。一ツを皿の緣へぬすくると又一ツが小指へ着く。手をあけて待つてゐる數人の視線が、私の指の先へ集つてゐるかと思ふと旅行的に鐵面皮の私の顏もどうやら熱つてくる。指先の飯粒をイ、加減にして煮肴に向つたが、愈皿の處まで行くと指頭

の力がグタリとして飯を摑んだ指は煮肴を拷るだけの勇氣はなかつた。とう〳〵往生してホークを取上げて魚肉の小さな一片を取つて皿に運び、匙で汁を掬つて肴と飯とへ等分にかけた。それから家人一同の五指十指十五指が錯綜往來したことは云ふまでもない。只私は此場合據ろない賢明の策を採つて、極めて小食で其場を切上げた。

こんな事も確かに旅中の一興に相違ない、否稀に出會ひ得る旅行の大切な獲物である。アギナルド家はアノ地方の舊い、豪族で、假令當主が革命史上の大立物にならなかつたにしても、比島民の間に自然統領に推されべき家柄である。マニラ市街に住んでをる氏もない土民などこそ、却て西洋人かぶれしてホークやナイフで食事をする者もあるが、舊いアギナルド家の此の午餐こそは比律賓少くとも呂宋土民の固有の食事法であらねばならね。マニラの市街こそさうでもないが、郊

外から田舍へかけて、墻の間には一寸手を伸ばせば鈴生りに生つてをるバナナが採れるので、土民は腹が減つて來れば此の天然の食糧を三四本も嚙れば、生命には別條がない。幾分料理氣を出した處でそれを油揚げにして、バナナのフライで腹を膨らせばそれで足りて行く。常夏の國の有がたさに着物は一枚で足る。隨つて此の衣食の無造作が比島民を懶怠にし、無氣力にするのであらう。親讓りの箸も一寸考へものである。

一九　南洋の旅興

政治論は浴衣がけには禁物であるから止めるが、一體日本人の對南洋論ほど亂暴で且區々なものはない。而も實際其地へ渡つて事情に

通じてをる者が幾人あるかと云へばお話にならぬほどの小數である。

さて常夏の南國の興趣は何んなものであらうか。

先づお笑艸に私の腰折から始める。『鑛を追ひいるかに逐はれ我船のけふも亦見つスマトラの山』、歐洲行の船が新嘉坡を出て、スマトラの北岸が大陸に迫つて、自然の海峽を成してをる長い間を二日に亙つて進航する時の暑さは亦格別である。柴棍のことを亞細亞の小巴里とか、瓜哇のことを世界の樂園であるとか云ふのは、西洋人のお世辭でなければ誇張である。アノ暑さを考へると、護謨が幾分儲からうと、果物が如何に美味からうと、南洋の常住は餘り望ましいものではない。只旅行者として、或時期を過ごすことは恐らく南洋ほど多大の興趣を感じる處は他に無からう。花や葉の飽まで鮮麗な色彩、驟雨の爽快な氣分、綠蔭の湧くが如き涼味などは、南洋旅行者の獨り享受し得べき賜

である。夕立の眞の趣は赤道近き熱帶地方でなければ實は味はふことは出來ぬ。日本なら『行水や沛然として夕立す』位で濟ましてゐられるが、南洋の驟雨ときては眞に底拔け雨で、雨勢極めて猛烈、下界の何物をも降り飛ばして了ふといふほどの豪雨である。支那では哀猿と云ふ熟字が詩文に用ひられてあるが、これは南方支那から來たもので、驟雨に驚いて啼き叫ぶ猿を云つたものであらう。南洋の竹は數丈の高さで鬱蒼と茂つて、所謂篁を成してをるが、一旦驟雨が襲つて來ると、親猿も子猿も、幾十匹となくキー〳〵と叫び續けて竹林を登つたり下つたりする。凡そ二三分間で五分と續かぬ南洋の驟雨は、今まで盆を覆すほどの降方がピタリと止まる、同時に猛烈な太陽の直射が、雨に洗はれた青や紅の色の一層鮮に見える幅の廣い葉を照り付ける。二分と經たぬ間に路上にも枝にも葉にも露ほどの雨の跡もない。南洋

植物景觀は羅葛類の壯觀と綠葉の美觀とあるが、これにアノ驟雨が急襲する時が一番壯快であると思ふ。赤道附近の航海者が夕立雲が見えると眞裸で手に石鹼一つ持つて甲板へ飛出して待つ間もなく、襲ひ來る急雨に瀧でも浴る氣になつて、頭からシャボンを塗すくり着けて手取早く雨浴を濟ますのは、航海者に取つての無上の慰樂だ。デ天然の一浴を濟ませて、悠々と褌でも締めようとすると、眼前に開かれてを る瑠璃色の海面を、銀の矢のやうに飛んでをる飛魚の愉快げな樣は、誰れにでも詩趣を興させる。

新嘉坡の植物園や瓜哇なるボイテンゾルグの植物園などは、旅人の爲に確かに樂園である。動物界から云つても鰐やら毒蛇の害は怖るべきではあるが、亦天狗猿の鼻の格好で笑ひを催すこともある。守宮の或る種類のものが、室内や蚊帳の上で奇聲を發して、初旅の者に輕い

驚きを與へることや、南洋蛙として特色のある牛鳴蛙が、牛のやうな太い聲で水田河邊に鳴いてをるのも、亦旅中の新興味である。旅人の眞骨頭は天地と共に同化することが第一であるが、天地萬物も何一つとして旅人を樂しましめぬものはない。

二〇 旅と酒

上戸と下戸と何方が意地が汚いかと云ふことは、旅へ出ると直ぐ分る。上戸の手は宿屋へ着いて荷物の處置をするよりも、先づ喉から先きに手を出してをる、酒の蟲が承知しないのだ。激しい手合になると酒があつての旅だ、旅をして酒を飲むのでなく、酒を飲みたいために旅をするのだと云ふ。ツマリ旅趣の中の酒興でなく、酒中の旅趣を味は

んとするのだ。先づ宿へ着く、一風呂浴びる、浴衣がけか褞袍姿にでもなつて、胡坐をかいた時に、是非なくてならぬものは酒である。上戸に取つては此時の酒は恐らく友達に會つたやうな氣分であらう。山を見るにしても、酒が一緒に見て呉れる、朝來見聞した道中の追想も酒が一緒になつて感興を俱にして呉れる、浴後樓外の嵐氣に對して詩趣が動いて來れば、酒が特に加勢して趣を添へて呉れる、肱を曲げて天下でも取つたやうな氣になれば、早くも酒が華胥の國へと手引して呉れる。實に獨り旅の身に取つて、女房とも友達とも話對手ともなつて呉れるものは酒である。是等が旅客として上戸の一德だ。

處で私は生憎水陸兩性動物で、下戸とも付かず、勿論上戸とも行かぬ、一年に一度ほど酒興を感じ、酒興を感ずれば一席一升を下らぬやうな變體酒客であるから、通常旅行中には酒盃を手にせず、從つて上戸黨と

共に旅中の酒趣を談ずる資格はない、愛には只聞いたまゝを記す。

內地の旅で一番に感せらるゝのは關西地方の旅に特に美酒の味を感ずる反對に關東東北地方が概して酒の惡いには閉口である。尤も秋田附近から米澤地方へかけては、酒飲の多いせいか概して酒が好い。寒氣が烈いのと冬籠りの間に酒趣味が一般に向上する結果でもあらうか。宿へ着いて愈浴後最初の酒盃を手にした時に、それが惡酒であると、最早樂みの七八分を奪り去られたやうな氣がするとは、上戸黨の一致せる告白である。處で今日では大概の土地へは壜詰で灘の芳釀が行亙つてをるが、地方の貧弱な宿屋になると此の備へがない、或は又折角の美酒に水を分りなどする。それ故上戸黨の一說には灘の變なものよりも、寧ろ地酒の相當なものが可いとも云はれる。又海岸地方へ泊つた時の一難は、所謂醉醒の水が意に滿たぬ不平がある。ツマリ

海岸の水には多少とも鹽味がある、イザ眼を覺まして旅の衾から半身を伸して枕元の水差から水を飲んで見ると、鹽氣があるので失望し、幾ら飲んでも飲んでも渴が止まらぬと云ふ始末である。これに引替へて關東者が京阪地方へ旅して、宿屋での獨酌に錫の德利の重さにマダある〳〵と思つて樂んでやつてゐると、何時の間にやら空德利であつたなどは、獨りで催す旅中の興である。

私は伊太利の旅行中、或時汽車の窓から一リラ(約四十錢)ばかり出してお辨當を買ふと、賣子は西洋式辨當一ッを渡して尙今一ッ取れといふやうな容子をするので、ヨク〳〵見ると葡萄酒の壜が一ッ附いてゐるので、之も早く取つて呉れと云ふのだ。流石に饂飩と葡萄を農家の副業としてをる伊太利だけに、汽車のお辨當までお酒を一本附けて幾何と云ふことに定めてあるのだ。その又壜が口の長い眞圓な一寸趣

のある壜で、葡萄酒が口の所まで入れてあつた。此時ばかりは如何に水陸兩性の私も、パンとフライを嚙つた後で、壜中の約七分通りを平らげた。同車の客を見渡すと何れも同樣上戸趣味を發揮して御座る。一二時間後列車が或驛へ着くと、掃除男が辨當の殼を片付けに來て、私の壜に二三分通り殘つてゐたのを見付けて、一揖して手早くそれを持去つた。大方此男も伊太利の呑助であらう。

二　西伯利道中

露都訪問の貴族院の殿樣方も愈〳〵今夜御出發である。これを機會に西伯利道中の如何にも悠々たる有樣を書き付けて見よう。何分振出しの浦鹽斯德から、上りの露都までは無慮三千餘露里と云ふのである

から、若し昔流の膝栗毛旅行でテクるならば、春燕五十三驛秋鴻七十二程とでも云ふべきで、春から秋頃まではかゝらう。それを兎も角十二三日で通すのであるから、假りにも西伯利鐵道を緩臭い汽車だなどと云ふことは出來ぬ。併し西伯利趣味から云ふと實は西伯利旅行は其固有のタランタースの旅でなければならぬ。タランタースとは露西亞固有の三頭立の馬車を言ふので、アノ虚無黨や革命黨の國事犯人の西伯利追放も、又郵便物の驛遞も西伯利鐵道以前には皆此のタランタースに由つたものである。それ故今日でも西伯利鐵道の急行列車以外の汽車が、薪を燃したり蠟燭を點したりしてゐるのは、恐らくタランタース時代の氣分がまだ殘つてをるのであらう。

露西亞にも日本と全く同樣な急げば廻れといふ諺があるが、これは性急な日本人にこそ必要な教訓になるが、左なきだに悠長な露西亞人

には全く無用な諺である。元來急ぐといふこと、急行といふことが露西亞には不釣合である。況して歐亞に横はる大荒野の西伯利では、急行といふことは殆ど無意義である。それ故眞個の露西亞趣味を味はふには、列車が四等に分たれてある西伯利の通常列車で、一ト驛に十五分乃至廿五分も長停車して、十七八日ほどもかゝつて無邪氣な百姓連と三等車で一處に旅行するに限る。

西伯利の八月は鐵道沿線に咲亂れてをる名も知れぬ野花の種々が美しい。釣鐘草やら桔梗に似た花やら、又稀には野百合なども交つてをる。白樺の森は何時見ても畫趣を呈して美しい。汽車が途中の小さな驛へ着くと、裸足の女の兒が野花の花束を五ッ六ッ手に持つてプラットフォームへ散歩にと下車出た夫人連へ、我れ先に買つて貰はうとせがむ。實際何日も何日も窓外の同じ景色を眺めて、走り續けてゐ

る西伯利の汽車の客には、二三哥で買取つた野花の花束をコップに投入れて、窓際に据ゑて置くだけでも、自から無聊を慰めるに有效である。朝一番に着いた驛で、更紗の服に更紗の頰冠りをした百姓の神さん連が、搾りたての牛乳を壜詰で賣に來たのを買取つて、直通列車の廊下に取付けてある小さな腰掛に腰をおろして飲む味は亦格別である。

地平線の眺めの濶大なことは日本ではとても見ることは出來ぬ。一望際なしなどと云ふ言葉は、西伯利の曠野で初めて實際に見られる。一直線に劃された地平線と一直線に敷かれた數條の鐵路とが遠い果まで走つてをる。若し其處に些の地物でもあれば、地平線上に黒點の樣に凸起する、馬でも人でも所謂豆人寸馬だ。然らば三千露里の長程矚目する處頗る平凡であるかと云ふに、旅客にして若し寫生が出來るだけの畫筆があるならば、西伯利道中は可なりに珍らしい寫生の料に富んでをる。ヤクーツクあたりの田舍から都へでも出た氣になつて、汽車の着く時間に盛裝して驛へ見物に出かけて來てをるブリヤート人の娘ッ子やら、ウラル近くへ來ると、大小の驛のプラットフォームへ小屋店を出して、「ウラル名物の寶石をお土產に」と勸めてをる中婆さんの臀と胸幅の大さなどは、確かに旅行家として寫生帖への好收穫である。露國では平時でさへ兎角寫眞の撮影は禁物であるから、旅客としては寫生に限る。

三三　畫家と旅

私は私の書架の一隅に在る『モダーン・ペインターズ』が目に着くと、何時も妙に最も緣遠い『江戸名所圖會』を聯想する。それはラス

キンに依つて此の不朽の書が成つた由來と、後者の書が父子三代の苦心に成つた由來の、孰れも山水と旅行とに關係のある類似點から來る聯想である。若しラスキンにして其父が山や森や雲の研究のために、息子を引連れて六回までも瑞西の旅をするほどの熱心家でなかつたなら、詩人にして美術の大批評家たるラスキンの天才を以てしても、僅二十三歳の若年でアノ名著を成すことは六かしかつたであらう。彼が一八四二年の秋と冬を書齋に立籠つて『近世畫家』の著述に沒頭したのは、實に五回目のアルプ登山から歸つて直ぐ取掛つた仕事である。その書の種類と價値とに相違はあるが、江戸名所圖會は編者の祖父が寛政中に初めて手を下したのを、編者の父なる人が刪補し、編者齋藤幸雄の代と爲つて文化に至つて完成し、文政に及んで漸く上梓の功を終へたもので、その間父子三代三十有餘年を要してをる。或る古老の手記によると僅か江戸だけの探勝ではあるが、橋一ッにしても祖父が書き上げて置いたものが、三代目の孫の時代には最早變つてゐたりなどして、一木一石をも苟くもせまいとした江戸名所圖會には、大なる隱れた苦心が潜んでゐるさうである。

近來畫家が頻に印度征伐に出掛るのは喜ばしい流行である。和田三造畫伯の如きは旅行の範圍を通り越して、どうやら印度に移住でも仕兼まじき容子である。南薰造畫伯も目下印度に旅行中である。美術院派の荒井寛方君も招聘に遇うて此の秋には印度へ出かけられる。かく印度行の機運が今日になつて勃興して來たのも、故岡倉覺三先生が率先して印度へ出掛られて、タゴール家に起臥して居られたことなどが、間接な緣因を成してをるに相違ない。當今の畫家中で歐山米水を最も廣く歩いてゐる人は、吉田博君であらうが、此人は旅行特に登山

ときたら殆ど狂的嗜好で旅中の危險などと云ふことは念頭にないさうである。高山專門の水彩畫家ときては丸山晩霞君を推さずばなるまい。スケッチを以て有名な中澤弘光君なども丹青界の旅行家として是非算へねばならぬ。其他專門々々に旅行の勢力範圍でも決定つてゐるかのやうに、中川、高村、滿谷諸畫伯の瀨戸内海、青山熊治君の滿洲、食田白羊君の小笠原島などの割據の樣は、動的なるべき旅行を固定させた嫌ひがあつて蓋し一得一失を免れぬ。只支那の山水だけが妙に日本畫家の跋渉に限られて、西洋畫家が手を着けようともせず足を踏込まうともせぬのは不思議である。三峽の嶮は高島北海君に一任し、南支那の風物を福田眉仙君に委し去つて、不關焉の西洋畫家は餘程の支那嫌ひと見える。僧雪舟の如きは明に渡つて、畫法を研究したばかりでなく、名山大川を盛んに跋渉したではないか。アノ旅行遊覽をやつたればこそ、その『山水畫卷』も、四百年後の今日天下の珍寶となり、山水に於て古今獨歩の稱を得てをる次第であらう。支那の山水は流石に大陸の山水である、我洋畫家はアノ江山を擧げて空しく日本畫家の手にのみ委すべきでない。私は和洋の區別なく今少しく畫家の支那漫遊熱の興ることを希望する。要するに畫家に取りては旅行は一半の生命である、廣重にしても五十三次の旅をやらなかつたなら、今日の世界的盛名はなからう。

三三　富士

富士は實の處俗了した。東鑑には『炎暑之節者召寄富士山之雪爲備珍物』とあるが、氷水一杯一錢の今日から見ると、こんな記事が果し

て事實であつたらうかと疑はれる。須走口登山路の開通式といふので、萬年筆の文人墨客が、李白を馬へ乘せたやうな危なげな腰付で頂上まで騎馬で登れたといふ今日、六根清淨も不清淨も一山托生の有樣で山靈を脅かしてをる。隨つて今日古人の登嶽日記の種々を取つて讀んで見ても、餘りに仙俗の差があつて隔世の感を禁じ得ぬ。故末永鐵巖の『富嶽遊艸』は今手許にないから、抄錄して例證に備へる譯に行かぬが、アレあたりが比較的新しい登嶽記であらう。が、それすら最早今日の登嶽事情とは餘程の差がある。勿論富士登山の方法は、今後尙色々の施設と方法の講ぜられて、一層容易になるであらうが、七八歳の垂髫兒を無理に登山させて喜んでをる物好きだけは止めたいものである。

併し俗了されたのは登嶽法と登嶽者とであつて、富士そのものではない。先日も馬で登つた私の友人が、頻に乘馬登山の特色を述べるから、私は李白の詩に『山從人面起、雲傍馬頭生』といふ句があるぜと云つたら、「眞に其通りだ」と云つてゐた。多少の變化は致方ないとして、富士そのものが俗了せぬ間は、その千變萬化の奇觀、天空雲際の大觀には李白もあらう白樂天もあらう。『白雲似帶繞山腰、青苔如衣掛岩肩』などいふ景は到る處に見られて、白樂天が今日我國へやつて來て登嶽した句かとも思へよう。固よりアノ偉大な天然の景物は、區々たる人爲で俗了さすことは出來難いにしても、問題は今後尙富士を人手にかけて俗了せしむべきや否やである。

筑前の野中至といふ青年氣象學者が、世を驚かしたのも最早二十年前の昔となつた。彼は我國の氣象測量は富士山の上でやるべきであると唱へて、新婚の細君と二人連で、雪中の富士へ登つて冬籠をした。

これは恐らく開闢以來の第一人者で、學術上の研究を別にしても眞に日本男兒の剛氣を發揚したものである。世の中は平凡なもので、こんな高い處の人の事は直忘れて了ふが、彼は廿年來心は一日として富士を離れたことはないさうである。富士は元來文人騷客を通しての風景觀としては、殆ど見盡されて居ると云つても可いが、科學者に依つての研究は頗る幼稚である。今年の夏の初頃德川賴倫侯の主宰で、富士の學術的探檢が催されるかの報道があつたが、遂にお流れになつたのは殘念なことであつた。アルプス登山の歷史の如きは、第十四世紀の上半から開始されたとか、その連峯中で最も危險視されたマッターホーン山の如きは、晩れに晩れて千八百六十五年卽ち今から僅五十年前に、初めて最初の絕頂登攀者を出したに過ぎぬなどいふことが記錄されてあるが、我同胞の富士登山は何時頃から始まつたものであるか、そんな事すら邦人に知られてゐないではないか。富士が歌題や畫題として取扱はれて居るのは、殆ど有史以來で、業平東下りの背景やら、富士見西行の如きは歷史的圖案と成つてをるが、登嶽の歷史に至つては完全に判つてをらぬ、況して植物學、氣象學、地質學上の富士は、果して何の位まで着手されてをるであらうか。斯なる方面の研究が未だ完全に行はれて居らぬ先から、先年來富士山を中心とした一大國立公園の設計なるものが、一部社會に唱道されて、唯西洋の公園設備の模倣にのみ腐心して、富士の俗了破壞を念はざる嫌ひがあるのは遽に贊成が出來ぬ。獨得固有の風景は獨得固有の方法で維持せねばならぬ、アノ風光に富む裙野にヤタラ水力電氣やら乘合自動車を持出すことは考へものである。『元日の見るものにせん富士の山』富士に對しては何時までも此の心持があつて欲しい。

二四　入鄉從鄉

丁度日英博覽會のあつた時分だ、私は倫敦の田舍者になつて毎日市中を彷徨いてゐた。或時地下鐵道で列車を待つてゐると、思ひ掛なくカランコロンカランコロンと下駄の音のやうな響がする。此頃では新築後の我が東京驛でソラ改札となると改札口から雪崩込んで、アノ隧道式の道を我先にと急ぐ下駄の音が、セメントのたゝきに轢つて、低い天井に反響するその騷々しい物音と云つたら、同じ仲間の我々と雖も聊か閉口である。併し倫敦の地下鐵道で實際駒下駄の音がしようとは誰が想像しよう、眞に我耳を疑はざるを得なかつた。私は思はず振回つて見た、同時に同じく列車を待つてプラットフォームにゐた十

四五人ほどの西洋人も、其奇異な物音に振回つた。スルと曲折したチューブの曲り角から、現れたのが一人の日本婦人で、勿論和服で素足に利休を穿いて御座る、博覽會に雇はれて來た女でゝもあらう。十四五人の目は一時に此婦人の上に投げられた、同時に私は知らず識らず顏を他に反けた。婦人は臆する氣色もなくカランコロン〳〵と駒下駄を鳴らして、曲り角から皆んなの立つてゐる邊まで進んだ。間もなく疾風のやうに列車が來て停つた。彼女が前方の入口から這入りさうであつたから、私は小さくなつて後の方の入口から乘車した。後から想へば如何にも意氣地のない私の態度であつたと思ふが、倫敦の街を駒下駄で歩いて貰ひたくない希望だけは、今も尙舊の如しだ。

併しこれは私の考への方が間違つてゐるかも知れない。國士の模範とも云ふべき故高橋自恃居士は、たしか倫敦巴里を五ツ紋の羽織と

仙臺平の袴で押通されたやうに記憶する。又、現代の我婦人界で最も明晰な頭の主人公である與謝野晶子女史は、裾模様の和服姿で巴里の街を歩かれたさうである。勤儉主義を一枚看板にされてをる前田正名翁は歐羅巴露西亞を被布姿であちらこちら乘廻されて、尠からず在露大使館の役人どもを顰蹙させたものだ。道理から言へば西洋人が洋服を着て日本の街を歩くのだから、日本人は和服を被て西洋の街を歩くのだ、その間何等の矛盾もなく疑問もない、そんなことに臆するのは畢竟貴様の卑屈千萬な量見によるのだと叱られれば、一時はさうかとも思ふが、腹の中の蟲は依然承知しない。私は浴衣がけなどと題して旅行談をやつてをるやうなものゝ、實は私には和服に書生下駄で西洋の街を歩く勇氣はない。

何も唐人の言草まで引合に出す必要はないが、曲禮に『禮從宜、使從俗』『入竟而問禁、入國而問俗』とある、所謂郷に入つては郷に從ふの意で、旅行者としては一番肝腎な心掛であらうと思ふ。私は日露戰爭以前哈爾賓に在留してゐた時分、支那服を着てゐたことがあつたが、露西亞人には時に馬鹿にされても、支那人には餘程氣受けが好かつた。假令衣服を夷狄にしたとて、外臣某と云ふほど心が腐らなければ可いではないか。

處が此頃和田垣兎糞博士の著書を拜見すると、『桃と櫻を兩手に佛國公園の逍遙』といふ題がある、讀み行くと十六と十四の姉妹の日本少女が純然たる日本服に裝つて各團扇を手にした其二人の乙女と、リュクサンブール公園を博士が共に逍遙して、公園散策の士女の視線を此方へ集め、讃美嘆賞の的となつたと云ふ美しい記事である。『花の巴里色香爭ふ花の中に眺めも飽かぬ大和撫子』とは博士當時の詠であ

る。斯うして見ると和服問題乃至駒下駄問題は私に取つては愈迷宮に入つて來た。ソコへ昨年私の尊敬する露西亞のプラント老博士が初めて日本へ來遊されて、私は二三日市内を案内したが、或時老博士は私を見て「君は何だつてソンナ洋服など着てゐるのか」と博士は御自身の襟をさも苦しげに指でポン〳〵と彈いて「寛濶な日本服の方が思想を使ふ者にはどれ程好いか分らぬ」と言はれた。勿論私の疑問は外國で旅客として和服と下駄がどんなものかといふのであるが、和服は左程西洋人に奇異の觀を與へてをらぬことだけは分つて來た。疑問は當分疑問として預けて置く。

二五　北雁南鴻

今の警視廳のお役人には好かれまいが、私は井原西鶴が大好きだ。男盛りの膏ぎつた四十二と云ふ歳に『好色一代男』を書いてとうとう『好色五人女』『男色大鏡』など云ふ邊まで脱線して、圖らずも浮世草紙の專門作者のやうに受取られて了つたが、本來は大の旅行好きで、我國東西の山河足跡到らざるなしと云ふ快男兒である。支那人は七歩の才などと云つて曹植の詩作力を驚嘆してゐるが、俳人としての西鶴は曾て獨吟をやつて、一日二萬三千句を吐いて儕輩を驚かしたほどだ。ツマリ斯道の達人、道中の達人、俳道の達人といふ具合に精力絶倫の男だつたに相違ない。此人の大旅行記とも云ふべき『一目玉鉾』を見ると、蝦夷の先の離れ小島の記事さへ載せてある。今人は斯ういふ點に就ても、中々に古人に企及し得ぬ所が多い。浮世草紙の片々たる作者とのみ思はれてをる彼の如きが、元祿の昔に蝦夷の果までも旅

してゐるとは驚かざるを得ぬではないか。その他寛政年間に谷元旦、安政年間に横井再生の蝦夷旅行の如きは西鶴に亞での豪物である。

處で私に一疑問と一案がある。我國ほどに寒帶から溫帶、溫帶から亞熱帶まで、帶のやうに長く蜿蜒たる國柄で、何故邦人が好んで此の天惠に浴せぬであらうか。一軒の家でも夏は風通しの好い窓の下で寢轉び、冬は暖かな爐邊に集まるが自然である。同じ道理の下に夏は樺太北海道の避暑を奬勵し、冬は臺灣の避寒を流行らせることは自然の轉地法ではないか。尤も旅行上の興味から云ふと、暑い處へは暑い時分に行き、寒い土地へは冬行く方が其地の特色が見られて好いが、避暑避寒の方法として夏の別莊を北海道又は樺太に構へ、冬の別墅を臺灣に造るなどは奇拔だ。生來生白い西洋人は餘程日光に弱いものと見えて避暑の計に於ては天下到る處に萬全の策を試みてをる。印度では

はヒマラヤ山麓のシムラ、瓜哇では大植物園のボイテンゾルグ、比律賓では北方のバギオ、日本では函嶺、輕井澤、日光などを定めてをる。波斯に於てさへテヘラン北方の所謂イラン高原の林地へ、天幕張りで避暑地を造るほどである。私は我國の成金共が、函嶺や日光の平凡に落ちずに、夏居冬屋を樺太、臺灣に設けて、夏尙寒く、冬尙暖かき趣を味ふ珍趣向に出でんことを希望する。江湖洲渚の間に泊する鴻雁でさへも、秋は南し春は北するではないか。

博士と云ふものは其實狹士で、自家專門の其又專門の狹いことだけより知らぬ連中であるが、萬有を悉く消化してをる眞の博士たる井上圓了先生の所說によると、北の鴉は惡戲者で、南の鴉は小兒の友達ださうだ。鴉も雀も居らぬ小笠原島は格別として、琉球あたりでは愛らしい鳥として、子供までが鴉を可愛がり、北海道では作物を荒し家根を破

るばかりでなく、鳶の代理までして女子供の持つてゐる油揚までも掠つて行くさうである。南北に於ける斯んな自然の一小變化ですら、旅行者に取つては少からざる興を覺える譯である。日本人は旅行的趣味から見て、今少し其の南北に長々と延いてゐる地勢を利用せねばなるまい。

二六　啞の旅行

『啞の旅行』とは誰れが言び出した事であらう。鎖國時代の我等の先祖には旅に出ても流石に此の心配はなかつたが、今は足一歩海外に出づれば動もすれば啞の旅行である。西洋人の内には十數箇國の言葉を操る人も珍しくないが、日本で三四箇國語の話せる人は極めて少

數である。勿論旅行者は語學者ではないから、便利をタスだけの程度で澤山である。而も此の簡便な程度の外國語ですら、日本人は修得してをらぬ。現に支那に居り又は支那に遊ぶ外國人中で、支那語の知識の最も貧弱なものは、恐らく日本人であらう。況して北露領に入り南南洋へでも行けば十中の八九は確に啞の旅行である。邦人の旅行趣味を擴めるには今少し、各國語を興味を以て修得する必要がある。

既に語學となると肩が凝つたり、頭が痛くなるが、旅行上の便利を程度に其土地々々での必要な言葉を覺えるのは、却々に興味あるものである。『馬コの兒コの足コの裏コに金コを着ける』とは、仙臺生れの或る老獸醫が蹄鐵を説明するときの話振りであるが、外國語にも斯んな方言の面白味はあるに違ひない。長崎パッテンは But then の確かな轉訛だなど云ふことも面白い。畢竟旅行者の心掛けとしては、樂み半

分に其土地の言葉を覺えて、出來るだけ土地の言葉を用ひる心掛が必要である。南米へ出稼する歐羅巴の賣笑婦などは、獨西會話篇、伊葡會話篇、露西辭書などを枕頭に安置して、千客萬來凝滯する所なしと云ふ有樣である。ボルネオ島のクテイといふ處の蠻王は、最早六十以上の高齡であるが、却々快濶な王樣で、數多の物好な旅行者を多年引見した經驗から、初めての謁見の客には劈頭第一「君は獨逸語を解するか」「露西亞語を話すか」と疊かけて、賓客が若し「話しませぬ」と答へると「ハハー予は知つてをるが」と來る。若し客が「分る」とくると「予には分らぬ」と逃げるが常例ださうである。尤も此の筆法は決してクテイの蠻王ばかりでない、斯く申す私も諸方の旅中で對手を見すましては、此のクテイ式を發揮したことは決して一兩度ではない。語學力の貧弱な奴の悲痛さである。要するに何でも珍らしい土地へ行く際には二三百の單語を獨修して行くに限る。私は一昨年ガリシヤから露領波蘭を歩いた時に、唯一冊の露波、波露對譯辭書のお蔭で可なりに用を便じ得た。

日本の書生さんは英語を萬國語のやうに思ひ込んでゐるが、大變な間違ひだ。英吉利から極東へ來る沿岸地方こそ英語の世界であるが、一旦ドヴァー、カレーを東へと渡つて大陸へ上つたが最後、英語ほど不便な言葉はない。若し英語先生が一言一句も佛蘭西語を知らずに歐洲大陸を歩くならば、身は世界の最中心に居ながら、世界の出來事何一つを知ることも出來ず、山中人同樣、魔胡付けば曆日までも忘れ兼ぬ見地目さである。歐羅巴は何と云つても佛蘭西語で、佛語こそは恐らく世界語と云つて可からう。世界語といふのが不穩當なら、國際語といふことは出來よう。私の實驗で今でも口惜かつたのは、私が中央亞細

亞を旅行して、サマルカンドの舊市に成吉思汗の墓のある寺を訪ねた時、寺男の案内で墓石のある地下室へと降りようとする際、一人の紳士風をした波斯人が私を顧みて、佛蘭西語で流暢に話しかけた。大分長く話した時分一向私が返事をせぬので、不思議な顏付で「貴君は實際日本の紳士か、佛蘭西語を話さないのか」と言ひ放してドン〳〵先へ降りて行つた。啞の旅行ほど馬鹿に見えるものはない。

二七　旅の用意

先頃の登山慘事以來、登山に就ての用意は夫々諸方で議せられた。普通の旅行の用意、登山の用意及探檢の用意は、三者の間に各差別があらう。併し概して邦人は此點に於て案外に輕舉みである樣に見える。

又邦人には旅行や探檢や登山に是非必要な資格すらも吟味せずに決行する嫌ひがある。心臟の弱い身體で登山を企てたり、時差の測量法も知らずに南極探檢を試みたりする。最も驚くべき最近の例は我學界の二大旅行家とも云ふべき神保小虎博士と鳥居龍藏君とが、今頃始めて青山の原で陸軍の者共から馬の乘方を練習して居られる事である。神保博士は或はアノ長い御自身のコンパスに信賴されることの厚き、是迄馬脚は不必要と思はれてゐたのかも知れぬが、鳥居君に至つては、蒙古の旅行者として、湖南廣族地の探檢者として更に圖們江畔の踏査家として、今頃馬の稽古とは眞に不可思議千萬である。處で旅の用意と云ふことに就ては、西洋人も日本人も古人も今人も、旅行家と云はれるほどの人は皆相應に苦心し研究してゐる。澤元愷は長崎から蝦夷まで所謂廣袤五千餘里を遍歷した寛政(百二三十年前)の大旅行家

であるが、その有名な記行書『漫遊文草』の末尾に、遊具略として旅中携帯品の注意が書いてある。就中衣服に關する注意に於て春秋に用ふべき袷としては、繭紬結城紬が最も佳品としてある。夏の旅の着物には晒布は宜しくない、木綿か紬かに限る、琉球布も亦佳しと書いてある。股引脚袢の一處になつてをるものは不便だ、第一水を渉る時に、第二夏は唯脚袢のみを着ければ足るからである。覆膊は小紋の布で作るか又は所謂蔑里耶須を以てするも亦妨げずと書いてある、其頃既に葡萄牙あたりから渡つた莫大小があつたのであらうか。

此他佩刀は短いものにせよ、根を攀ぢ巖に踞するに方つて戛刺する恐れがある。夾囊は僧家の衣囊に倣つて懐中して頸に懸けよとある。元愷は尚春秋共に旅中は鐵骨の扇を携へた。輕い扇は忘れ易いのと鐵扇なれば護身用をも兼ね得ると云ふのださうだ。此の他辨當箱は

有馬の竹箱に限り、提燈は小田原に限ると書いてある。

文化七年の江戸の出版で『旅行用心集』といふ書がある、その中には、種々雑多な道中の箇條書が記してあるが、中に日和見の歌と云ふのがある。つまり當時の旅人の天氣豫報だ。

筑波はれ淺間くもりて鵙鳴かば
雨はふるとも旅もよひせよ

五月雨春は南に秋は北
いつも東風にて雨ふると知れ

など云ふのである。無論西洋でも此種の研究は綿密にされて居るやうであるが、寡聞にして多くを知らぬ。少々古い處ではゴルトン氏の Art of Travel, 1876 などは廣く知られて居る書であらう。一箇月程前の新聞記事に、歐洲の戰場では敵も味方も虱に惱まされて、少からず軍

隊の意氣を消耗させると云ふ報道があつたが、私は日露戰爭に從軍した經驗からして、俗に言ふ虱紐の效用の絕大にして、效顯神の如きものあるを永く記憶してをる者である。我國固有の懷爐がポケット・ストーヴといふ奇名を付けられてドシ〳〵歐洲の冬の陣へ持込まれる今日、我等祖先の發明品たる虱紐をも一つ輸送して、忠勇なる士卒の塹壕の假睡を保證してやりたいものである。私は生れてから病氣を知らぬ爲か、旅行に藥品を用意したことはないが、普通如何なる旅行書にも藥の用意を訓へぬものはない。熊膽、奇應丸、反魂丹などは、孰れも古人の道中藥である。人蔘が流行出した今日だから熊膽も決して馬鹿に

二八　路銀

言葉の方は假令啞の旅行でも人並の見聞は出來るが、外國の旅で金が無いと來たら浮木を離れた盲龜とやらで、二進も三進も行かぬ。勿論昔の日本では一旦鄕里を出たが最後、他國他鄕は總て今日の外國同樣であるから、古人も道中で一番大事にしたものは路銀である。イヤ路銀の携帶方で古人が苦心したことは、恐らく今人以上であらう。今ならば銀行の出す信用狀で、極簡便に隨時旅先で入用だけの金が取れるが、我國の昔の旅では着物の襟の中へ小判を縫込んだり、胴卷へ卷込んだりして、その重量で草鞋の切れ具合が違ふなどと、胡麻の灰の專門眼で睨まれて酷い目に遭ふこともある。旅の用意を書付けた古人の書を見るに錢囊は必ず右に着けろ、さすれば左の刀と權衡が取れて具

合が可いなどと訓へてある。今日では內地旅行の場合に金の心配は殆ど無用であるが、外國旅行中での路銀の始末は、私の經驗によると航海中は封のまゝ事務長へ預けて金庫に保管を賴み、陸行の際は、銀行の信用狀に依賴するのが一番である。たしかクック社でも信用狀の取扱をする。

高田文相は一昨年の歐米巡遊の際、丁度瑞西に居られた時に歐洲戰爭が勃發した。同時に何處からも爲替が全く停まつてしまつた。罪なくして配所の月は面白からうが、金なくして瑞西の山水では、流石の半峰學人も、少時は半呆愕人となられたさうだ。開戰當時歐洲在留の邦人で半呆式の慘い目に出會つた者は決して少くないさうである。斯んな場合になると昔流の胴卷主義も決して馬鹿には出來ぬ。千圓と云つた處で英金貨にして磅が僅百個だ、ハンケチにでも包んで腰の

邊へぶら下げても知れたものである。言ふ迄もないが何處へ行つても地藏顏で受取られるのは英國の金貨である。英語は世界語と迄行かぬが、英貨は確に世界貨だ。

旅と路銀の觀念は古來から餘程發達してゐたものと見える。經帷子を着せた死人にまで鐚錢二三文を持たせてやるではないか。十萬億土の旅へ二三文の旅費とは、馬鹿に相場が廉いが、元來足のない手合の旅だから、路銀は贅澤だと云へばそれまでだ。又旅へ出て金使ひの荒い人と地味な人とある。無論何方にも一得一失はあるが、元々見聞を主眼とする旅行である以上は、寧ろ何事でも何物でも、金と暇の許す限りは、足を運び、頭を衝込み、目を注けておくに限る。例へば巴里で極めて怪しげな、而も殆ど公認された一種の見世物のやうなものは、是非とも一度は見て置くべきものである。斯んな場合に三十金や五十金

を惜んで、基督敎國の裏面をさらけ出した大事な證據を見ておかぬのは、旅行者として賢なるものではない。さうかと云つて彌次喜多式に金錢の觀念を超脫した旅行は、現實世界には不向である。戰爭ならば血の最後の一滴までといふことも可からうが、旅行では最後の鐚一文までといふ必要は無論ない。日常生活の上にも金の使ひ上手と使ひ下手のあるやうに、旅先でも活きて金を使ふのと死んで使ふのとは、大した相違である。今一つの心掛けは兎角旅では往路で金を使ひ過ぎることである。諺に『登り大名、下り乞食』といふことがあるが、これは大概の者が陷る過ちで往路の濫費が祟りを爲すのだ。私は或時の旅行で西方からの歸途、哈爾賓の宿屋へ着いた時、蟇口の中へタツタ十二哥を殘してゐたことがあつた。

二九　支那學者

私は滿洲の旅行中に偶然二人の支那學者に邂逅した。丁度明治三十九年の冬から四十年の春へかけて日露戰後の北滿洲に於ける露國の態度を視るために、東清鐵道の沿道を徘徊き廻つた。凡そ見極めも付いたので、海拉爾を立つて哈爾賓行きの急行列車へ乘込むと、其汽車に歐露から通しで來た一名の日本紳士が、一人の佛蘭西人を伴にして乘つてゐたのに出會つて、直に懇意になつた。此の佛蘭西紳士こそは世界的に有名な佛國の支那學者シャバンヌ先生であつて、日本の紳士は澁谷馬の頭君であつた。馬の頭と云つても主馬頭の澁谷中將ではなく、佛蘭西から歸朝後一時讀賣新聞に居られた澁谷愛君である。シャバンヌ先生はこれから一箇處寄道をして、一旦北京へ出て、直に甘肅

省の敦煌へ向ふ豫定であると云はれた。私も丁度哈爾賓から直ぐ南線へ乘換へるので、奉天まで先生と直行同道することとなり、馬の頭君も滿洲が初めてと云ふので、哈爾賓と長春の乘換やら一切、私が東道の主人となつた。奉天へ着くと先生の所謂寄道といふのは、アノ鴨綠江上流の好太王の古碑を見に行かれるのだと知れた。當時の滿洲は戰後のこととて馬賊の横行も殊の外烈しく、況して鴨綠江の上流邊は林地に非ずんば山地で、此方面の旅行は常識から考へて頗る危險千萬なものである。然るに研究に忠實な先生に取ては危險などは念頭にない。奉天から單身古碑の所在地へ旅立たれる積である。漸くのことで確か支那側から相當な護衞兵を附けて出發されることになつたやうに記憶する。豫定通り古碑を探られてから、北京へ出られ、夫から敦煌へ向はれてアノ珍籍の大發見をされた次第である。一體西洋の學

サマルカンドにおけるタメルランの墓

者の支那研究に熱心で、且つ廣く邊外の地までも跋渉してをることは敬服に堪へぬ次第である。佛領河内に在る佛蘭西東方考古學校ポール・ペリオ教授の如きも、やはり敦煌の石室に經文古手書を獲られた學者であるが、まだ三十を少しばかり出たくらゐの若年で、北京語の會話などは流暢なものださうである。同教授のごときは支那西陲の地理古蹟の研究が目的で、露領中央亞細亞から新疆省に入り、庫車、烏魯木齊、吐魯番等に小一年も滯在したり、敦煌には三箇月の餘も逗留されたものだ。

今一人滿洲で出會つた支那學者といふのは、幸ひに日本人で有名な白鳥博士であつた。明治三十二年頃の夏であつたかと記憶する。私が北滿洲旅行を企てゝ、哈爾賓まで行つた時分に、白鳥博士も同地に居られて、哈爾賓の直東隣の驛になつてをる阿什河附近が、どうやら金の

古都であるといふ鑑定から、白鳥博士は阿什河城行をやられるといふので、多少之に關する話を當時の哈爾賓總領事今の滿鐵理事の川上君の許で博士から聞いて、同道こそ出來なかつたが、私も一日ほど遲れて阿什河城旅行をやつた。勿論專門眼のない私の事であるから、歷史的の研究などは出來なかつたが、當時盛んに此土地から掘出された支那の古鏡や古錢などを見た。海獸葡萄鏡などと云ふものは實は其時初めて見たのだ。金の古都に就ての白鳥博士の價値ある發見は實に此の時で、それから博士は寧古塔方面へ廻られて寧古塔から額木索への邊で、唯一人滿洲語を現に話す者に出會つたとの博士の話であつた。此旅行中確か方幾寸といふ純金の古印璽を支那人が賣りに持つて來たさうだが、それは何分餘りの高價なので官人や學者が手が出せず、三井の哈爾賓出張所の手に落ちたやうに聞いてをる。學者も足を資本に歩かぬと棒に當らぬ。

三〇 航海の樂

四面環海の日本に生れた吾々は、航海の樂を解することに於て、まだまだ西洋人に及ばぬ。航海の安全といふことは近時餘程分つて來たが、海上の樂を會得するまでには未だ行かぬ。タイタニックの沈沒の如きは大西洋の悲劇には相違ないが、アノ四萬六千餘噸の巨船の處女航海といふので、好奇心やら安全心やら、さては亦巨船内の贅澤な樂を味ひたい連中が、無慮二千人以上に上つたのであらう。無論二萬噸以上の汽船になれば、洋上の浮城で安全此上ない。陸上の城とも云ふべき汽車にも衝突や破壞がある以上、洋上の浮城がタマに沈沒したとて

不思議はない。

これに關して面白いのは英國水兵の偶話である。問者が「お前の阿爺も祖父も難船して死んだのに、お前は海は怖くないか」と云ふと、水兵は「お前さんの親父や祖父さんは何處で死になすつた」問者「立派に疊の上で死んだ」「それでもお前さんは疊が怖くないか」と云つたさうである。歐洲航路や濠洲航路の客船が、香港を出てソロソロ熱帶の海へかゝると、一等船客の爲に甲板の上へキャンバスの大きな水槽が張られ、水槽へは海からポンプで海水がなみ〳〵と入れられる。階段の昇口やら食堂の入口あたりへ『海水浴開始』の貼札が出る。朝は五時から六時までが男子、六時から七時までが婦人と云ふ風に、夕方も一時間宛を男女に分けて晩餐の前に甲板の海水浴が始まる。何分廣くて深い水槽に一パイ張られた海水は、一方から注入られて他

方から排出れるので、水は綺麗だ。それに船體の動搖がイヽ具合に槽内に波立たせるので、眞正の海水浴と少しも變らない。四邊が熱帶の氣分になつた時分に、面白半分に、ドブンと飛込んで鷗のやうに浮いて居る時などは、誰れが航海の危險などを想はう。實に上等な汽船の一等客ほど世に氣樂なものがあらうか。

喰ふか寢るか飲むか讀むか、これが一日の仕事で、それが一週間も二週間も續くのであるから、樂しからざるを得ない。中には髭を剃つたり着物を着更へたりなどして、晩餐の食堂へ出るのが五月蠅といふ人もあるが、それは瞑想好きの哲學者位のもので、西洋の女どもは晩餐の食堂へ、毎夜のやうに取換へ引代へ晴着を着更へて、互にこれ見よとばかり出て來ることが、航海中の唯一の樂みで又誇りであるのだ。

航海中の無邪氣な催しは恐らく赤道祭であらう。私はこれ迄赤道

を八月と九月とに南洋の海面で、四月に印度洋で、五月に大西洋で、都合四度び通過したが、季節と場所とによらず其趣は全く同樣である。軍艦に便乘して、印度洋で赤道を通過した時は、丁度四月三日の神武天皇祭に當つたので、何となく意氣の軒昂たるを覺えた。艦内の兵員共はその前日から赤道祭の用意に忙はしく、愈當日となると兵曹中で赤道通過の經驗の最も度數の多い者が、大海王に擬して身に亂麻を纏ひ、手には魚の附いてをる長い杖を携へ、海魔魚族に擬したもの、黑奴美婦に扮したものなどが其後から笛を吹き銅鑼を鳴らし行列を作つて艦内を練つて廻る騷ぎ、歡呼拍手の聲が印度洋上に響き渡る次第だ。今日では汽船の航海が何處の海面にも頻繁になつたので、赤道通過も珍らしくなく、隨つて定期の汽船では赤道祭は只昔語りとなつて了つたが、海上の樂みとしては如何にも相應しい催しである。私は船には弱蟲

であるに拘らず、遠洋航海の一等船客となるのは大好きだ。十日以上も航海すると、鼻糞までが眞白くなつてくるのを見ても、航海が如何に健康上に好いかが分る。

三一 記念物

旅行中買物をするのは一種樂しみなものである。その土地へ來遊したと云ふ記念のために、高尙な品でも實用の品でも買つて來ることは後日の樂しみになる。誰であつたか今一寸人を記憶しないが、帝大の教授で確か理學博士で、海外漫遊の際は其の行つた先きの土地で、必ず本を一冊、その國語の讀める讀めぬは別にして、記念に買つて來ることを習慣のやうにしてをる人がある。是等は最も上品な好い記念方

法である。露西亞ならばアノ不器用な百姓の冬籠中の産物である荒荒しい木彫細工などは、如何にも素朴な露人を記念するには適當である。鳥の形やら百姓家の形やら、香函やら筆立の類に至るまで、如何にも不器用な荒彫の處が純粹の露西亞人を代表するので、之を我箱根細工の如何にも器用に小ぢんまりしてをるのに比べると、露人と日本人の氣分が歴々と其上に浮んで見える。ヴェネチヤでゴンドラの型を模した置物なども面白い。西洋では大概の場所には、スプーンに其土地の景色の寫眞を化學的に燒付けた記念品を賣つてゐるが、西洋人にはどうか知らぬが、東洋人たる吾々には餘り趣味に合はぬ。私は長江筋の旅行から歸つた人から羅漢竹の杖と筆とを貰つたことがあるが、筆は今でも書齋の一隅に懸けてある。その隣の書架の一端に二寸八分ほどの黒坊主の立像が置いてあるのは、蘇州の孔子廟の家根の上から養子に御座つたものである。支那特に戈壁の沙丘阜上に茂生して居る珍樹たる紅柳を、支那から持つて還つて來た私の友人は、其一本をも私に分與することを客んだ。數年前ケーブ・タウンで私が阿弗利加記念に買つた二冊の『ウガンダの人種誌』の中には、自からケーブ・タウンの山中で採取した南阿の特産銀葉樹の銀葉が、幾枚か枝折代りに挿んである。

此點になると志賀矧川君は大の記念品屋である。有名な四松庵といふのが夫れで、畢竟同君旅行の記念品陳列所である。アノ博識とアノ趣味眼とで蒐集されたのであるから、面白からぬ筈は無い。旅行の記念品は學問上の標本とは違ふから、唯學術上の參考といふ點ばかりでは面白くない、多少とも其處に趣味が點加されなければ可けない。

私は濠洲旅行の記念に、椰子の實に鰐魚の頭を彫刻した「クロコダ

イル・ヘッド」と名づける珍物一個を所有してをる。これは英領ニュー・ギニアの土人が安全のお守りに、家の入口などに垂げておくものである。それに今一ッ例の「ブーメラング」と云ふ土人用の獸類飛殺機を所藏してをる。實は此の外に鰐の兒の五尺ばかりの奴を剝製にしたものを好記念品としてシドニーから持つて歸つたが、其當時惡友共二三人の勸めで、某中學の標本室用に賣飛ばして、一ト晩三四人で飲んで了つた。友人仲間には大庭が鰐を呑んだとて一時喧傳されたものだ。モ一ッ序に旅行上の珍藏品を云へば、サマルカンドなるタメランの墓の古刹の壁石、方一尺ほどのもので、其表面は五色の磁器で波斯式の古代モザイクが鏤めてある一片の瓦石である。他人に取つては格別もなからうが、私には之が中央亞細亞旅行の記念物であるだけに可愛い。

話が轉じるが、朝鮮の確か慶尙南道かの鮮人の特產物で、竹の杖に詩文が細字で燒付けてある特種な杖があつた。或時私は朝鮮を通過して之を見付け面白いと思つて、後赤壁賦を杖の上から下まで螺狀に燒付けてある竹杖一本を買つて、其足で北滿洲から東淸鐵道へ乘つたら、車中同席した露西亞の老紳士が、その朝鮮產の事やら記事やらを聽き取つて、是非にと懇望されたので、お安い御用と與つて了つた。兩三年後釜山や京城で熱心に尋ね廻つたが終に見出さなかつた。或る店ではアンナものは賣れませぬので引合はぬから、今では朝鮮人でさへ製作へませぬと云つた。土地の商人にアンナものと見られる物が、兎角旅人には珍らしいものだ。

三　比較地理

かけ離れた土地にある二個以上の山水や風光を比較して見ることは、旅行者に取つて興味あることであり、又旅行者のみが之を能くし得ることであらう。お茶の水の懸崖――と云つた所が今は汽車の爲に打壞されたが――に小赤壁といふ氣の利いた名を付けたのは誰れの仕業であらうか。恐らく聖堂あたりの漢學先生が、散歩の際にフト思ひ着いた位のことであらう。眞物の赤壁にしても可なり不潔い崖だと云ふから、十數年前のお茶の水なら結構小赤壁の役は勤まらう。蕪村の句であつたか、『鯊釣りや水村山郭酒旗の風』などはわざ〳〵支那に渡つて江南の春を賞して山水の比較をやつた譯ではなく、只杜牧の詩句を借用したまでに過ぎない。明治の初年中根香亭といふ人の

編述した日本兵要地理の中に、奈良の舊都を敍した末に、同じ杜牧の詩の轉結を附記して、南朝四百八十寺云々とやつて、奈良の都を詩的に想像させた處などは、今の地理教科書編纂者などの企及し能はぬ手際である。芭蕉も『奥の細道』に松島を敍して『扶桑一の好風にして凡そ洞庭西湖に恥ぢず東南より海を入りて江の中三里浙江の潮をたゝふ』云々と比較してをる。斯うして見ると山水風光の比較は、只旅行者と詩人藝術家のみが能くする所であらうか。

木曾川を以てラインに比較したのは矧川君である、日本中央山系にアルプの名を冠したのも、山水比較の念から來たものであらう。内地の山水にしても耶馬溪と寒霞溪は遊子文人の爲めに幾度でも比較されて優劣をさへ問はれて居る。今度シカゴ大學に新設の日本地理の講座を受持たれるジョーンス博士は、日本と米國の地理に酷似した處

が多いと唱へてをる人である。東京から九州邊までは大西洋岸の南北カロライナ州に似、北海道地方は最北のメーン州に似てゐて、土地の狀勢ばかりでなく、人情までも似て居るといふ說である。世界の港灣で一、二等を占めてをるのは、第一がブラジルのリオ・デ・ジャネロ、第二が濠洲のシドニイと定つてをるが、流石に兩港ともに似通つた點がある、これに我が南鮮の鎭海灣を加へたなら、眞に天下の三大港灣であらう。私は此の三港ともに親しく見てをるのと、其一つが我國に屬してをることを幸ひとするものである。特に港灣觀を離れて風景觀から云ふとリオ・デ・ジャネロは最も多く我松島に類してをる。八十八島の松島には青松白帆がある、七十の島嶼百餘の立巖が畫のやうに點散するリオ・デ・ジャネロには椰子と檳榔樹と雅趣に富む小艇がある。處で最も會心な事は富士である。日本人は海內と云はず海外と云はず、苟くも

形狀の富士に似た山さへ見れば、直に何々富士と名稱を下して了ふ。內地のものは枚擧するの煩に堪へぬが、それでも多少遠くの處では北海道の後方羊蹄富士、安東縣元寶山の安東富士あたりは珍たるを失はぬ。墨西哥の墨西哥富士などは最も面白い。此邊が恐らく富士の値打であらう。それにしても瀟湘八景に倣つて近江八景を作つた我等の先祖よりも、世界到る處に在留して恰好の佳い山とさへ見れば、何々富士と命名する今日の海外移住者の意氣をこそ愛すべけれと私は思ふ。

三三　探檢

探檢といふことは旅行の一部に違ひないが、生憎吾々の先祖は之を

試みる機會を持たなかつたやうである。宮本武藏あたりが娘ッ子の人身御供を助けて山中の怪物を退治した位が、昔の我國での探檢とでも云ふことが出來ようか。併し西洋人の所謂探檢は、流石に數世紀の歷史に富んでゐるだけに、如何にも大規模のもので、殘念ながら此事だけは東洋人は彼等の脚元にも及ばない。水滸傳を讀むと武松と云ふ大力無雙の壯者が、陽穀縣の山中で稀代の大虎を撲り殺す痛快な談があるが、宮本武藏武勇傳と同樣、個人の冒險に過ぎぬ。御朱印船が所謂南蠻諸國を經巡つたり、倭寇の連中が南洋方面へ出沒したなども、未だ以て探檢と云ふことは出來ぬ。畢竟吾々は探檢の味を知らぬ國民で、又其誇りを有せぬ民族である。そして健氣にも名乘を揚げた南極探檢はアノ通り龍頭蛇尾に終つた、殘念千萬なことである。

英國から此の世界的大戰亂の最中に、二人の大探檢家が恰も浴衣がけで吾々が近所の街を散歩する位の考へで、飄然として大探檢の途に上つたことは、吾人旅行黨の見逸すべからざる所である。一人はサー！オーレル・スタイン博士で、中央亞細亞の探檢に向ひ、他はシャックルトン中尉の南極へ向つたそれである。日本なら直に此の國家興亡の戰爭を眼前に控へて中亞でもあるまい、南極でもあるまいと攻擊もされ、人氣も寄るまいが、現にシャックルトン中尉の此の第二回南極探檢に上つた後、一時其安否の案じられた際には、英國では救援隊派遣說が盛んであつた、そこへ丁度南米フォークランド島へ中尉が安着したと云ふ報があつて救援隊派遣は見合せになつたのである。スタイン博士は先頃漸く中亞から印度へ出られた報があつたが、果して眞實であらうか。波斯で初めて佛跡を發見したのもス博士であり、阿富汗斯坦で新石器時代の遺物を發見したのも亦博士である。大探檢者を出した

ことのみで其國民の眞價を彼是れ云ふことは出來ぬが、近時一種の感情を以て、英國民を蔑視する一部の邦人の如きは、是等大探檢の下に潛んでをる英人の秩序ある勇猛心を測知する必要があると私は思ふ。

さて探檢の心得であるが、これは勿論場所によつて違ふ。が少くとも博物に關する一般的知識を基礎とし、生死の巖頭に動せぬ度胸と臨機應變の才と、そして鍛練された强健な體とが土臺になることだけは、共通の要件である。天幕の張りやうから運搬具の急造位の心得を要することは勿論であるが、護身用の銃や劒などは多くの場合邪魔になつたり、却て禍を招いたりする厄介ものであらう。蠻人の來襲に出會つた場合などは、一種の智慧で擊退することが出來ない以上、最後の天命を覺悟するより外はない。キャピテン・クックのやうな天の大使命を帶びた人さへ南洋蠻人の鎗の先に果てたではないか。若し日本人の中から南洋蠻地の喰人種から皮を剝がれ、顱骨を晒された大探檢家が出たり、南極で氷山に閉されて數萬の海豹の群に笑殺された探檢家を出し得たなら、日本人の名聲と眞價は今日に十倍しよう。探檢中野獸に出會つた時は、決して狼狽せず、此方からは知らぬ顏で成るべく通る心得が肝要ださうである。中には亦アンドロクルズの獅子も居らぬとは限るまい。

三四　瀨戸內海

東西二百四十海里の瀨戸內海は、黛を凝し碧を送り、千水萬巖布置按排の妙殆ど形容する辭が無い。古人で瀨戸內海を巧みに敍述したものは、帆足萬里の浮槎日記、澤元愷の汎海紀行等であるが、後者が『萬里

一碧、島嶼磊落、如瑠璃盤上列壁』と書いたのは、流石に老手である。實に此の壁を聯ねたやうな瑠璃盤は、晴に好く雨に佳く、白帆を追ひ水郭を迎へ、近く白堊の村邑に臨み遠く丹碧の樓閣を望む。太平洋畫會の二三子が瀬戸内海旅行團を作つて、之を畫化するに努めてをるのは喜ばしいが、島影岬角一點として畫ならざるはないから、大概の畫筆では間に合ふまい。古來文人歌客の一島一景に就ての吟詠こそあるが、瀬戸内海の全體を大觀した名作とては無いやうである。バイロンの如きでさへ多島海を謠うて、『自然の宮殿』だなどと平凡な形容でお茶を濁してゐるが、瀬戸内海は畢竟二百餘浬の大繪卷物である、畫くにも謠ふにも容易でない。尤も古人の詞藻の才として驚くほどのものでもない、芭蕉が須磨を吟じて『見渡せば眺むれば見れば須磨の秋』とやつたのは、やはり『松島やあゝ松島や松島や』とか『これは〳〵とば

かり花の吉野山』などの類で嘆賞その儘の句だが、之れでは徒らに景に呑まれて了つたので、こんな事では到底此の山水の大觀を詩化する譯には行くまい。誰れやらの『雲とのみ見てやすぎなむ淡路しま、わがふな人のさしてつげずば』などは、淡路島を餘程畫化したものだ。瀬戸内海では何と云つても淡路島と宮島とが東西に多島海の勝景を掌つてをる。淡路島は父島の如く宮島は母島にも相當しよう。それに灣中灣を成し、灘中灘を生んで遂に鳴門の奇勝をさへ生み出した。私は何故今迄に瀬戸内海の周遊が今少しく發達しなかつたであらうかと不思議に思ふものである。之を多島海に比すべきであらうか、ダルマチヤの海岸に比すべきであらうか、或は諾威西北海岸の島嶼の碁布するに比ぶべきであらうか、孰れも我瀬戸内海の兩岸の巒峰が、秀を競ひ峻を拔くの多趣なるには及ばぬ。若し畫のやうな遊艇か、鳥の翼

に似た帆艇かを、此の瑠璃盤上に浮べて峽灘の急なる所に差しかゝれば、所謂風帆迅駛、兩岸の峰巒頃刻萬變して、勢飛動するが如きものがあらう。大阪商船の周遊船も固より惡くはないが、私は讃岐粟島航海學校生徒の屢試用する、瀬戸内海巡航の帆を張つた小艇を特に愛する者である。『安藝の宮島廻れば七里、浦は七浦七惠比須』。小汽艇に鳶色の帆を張つて、七浦を廻つて七惠比須を拜むも面白からう。或は一峽の漸く寛なるに艇脚を緩め、峽を出でて再び海勢の鴻溶なるに會ふのは舟遊の蕉境に入るものではなからうか。此の間に南岸の讃州に僅に象頭山の鼻が海から見られる邊に、水神として金比羅を開いた古人の用意は驚かざるを得ぬ。金比羅參詣名所圖會は瀬戸内海の周遊をやる者の是非懐古の料に一覽すべきものであるが、私は頃日帆足萬里の浮槎日記を讀んで、偶金比羅の條に及んで思はず失笑した。『舟人高く

金比羅山至るととなふ、同舟みな起ち海水を汲みて、盥嗽禮を作し、競うて錢を以て薪木に縛着し、諸を海中に投じ、その沈沒せずして以て岸に達するを冀ふ』とある。これは享和元年の記事であるが、百十五年後の昨年、此の筆法を露西亞のゲオルギー太公が學ばれて、日本貨であつたか露貨であつたか金若干を「金比羅お出でナサイ」と艦上から投ぜられたのは、瀬戸内海の興味ある史話として永く傳ふべきではないか。

三五　宿屋是非

支那ほど寓意のある看板を掲げて、その商賣柄を悟らせる處は他にあるまい。遠くの方から見えるやうに、高く釣瓶が棒の先へ釣してあ

るのは、澡堂卽ち湯屋の看板である、言ふまでもなく水を汲んで湯を沸かすと云ふ謎であらう。滿洲の田舍を歩くと木で魚の形を彫つたものを、竹の先へ結び付けて門口へ出しておくのと、大きな鷄籠を竿の先へ着けて出しておくのとがある。孰らも旅籠屋の印である。肴も附けます鷄もありますと云ふ寓意だ。尤も之れは何家屯とか何堡子とか云ふ田舍の旅籠屋に過ぎぬが、都會の何々客棧など洒落た名を付けてをる專業の旅館でも、概して不潔である。然らば日本の宿屋は如何であるかと云ふと、不進歩極まると云ひたい。少し極端に言ふと手拭がタオルと代り、行燈が電燈と代つた丈で、營業者の精神狀態は彌次喜多時代の東海道の宿と少しも變りはない。襖一重でお隣の客と接すること、風呂の湯は一日に一二度代へるに過ぎぬこと、膳部が依然泊料の中に加はつて、喰つても喰はぬでも客の負擔たることなどは、今尙ほ

彌次喜多時代の舊慣を墨守してをるものだ。お客の方も亦一向進歩しない。給仕女を對手に一時間以上も晩酌氣取でやらかす、少々上機嫌になると何か唸り出す、襖一重隣の客の迷惑などは最早念頭にない。酒が飲みたくば女が話相手に欲しいならば然るべき場所へ出だすべきである。宿屋と料理屋と給仕女と藝者とを、動もすれば同一視せんとする我國の旅客は、精神的に尙喜多八式である。

地方を歩いて見ると、其土地で歷史的に有名であつて舊い宿屋が多くは寂れてゐて、新しい言はば成金式宿屋が繁昌してをる傾向がある。日光街道で、宇都宮の平塚屋や、中山道で熊谷の小松屋などは、舊い大旅館であつたが今では廢業した。敦賀の具足屋などと云ふ舊い宿は、コ數年來の努力に興つた熊谷旅館に霸を讓つた。これ等は新規のもの丶方が設備や努力に新しい點が多いからで、畢竟旅客が舊式な旅籠

屋式に滿足せぬ證據である、豐後杵築の錦水樓などは、庭園の美觀に於て海内第一と云はれてをるが、惜しいことに家はお粗末である。旅客に取つては待遇が第一、部屋の清潔で晴々したのが第二、庭園などは第三だ。都會の宿屋ならば庭園の眺めも多少は必要であらうが、四邊山水に富み、旅客も亦多く探勝を目的とする地方の宿屋としては、庭よりも室内の諸施設に力を入れることが肝腎だ。讃岐琴平の虎屋は、金比羅か虎屋かと云はれるほど名代の家で、驚くほど大きな旅館だ。主人が夫婦喧嘩でもすると、亭主が彼方の部屋此方の部屋と二三日部屋さへ變へてゐれば、旅行したものだと思つて女房はとう〳〵諦らめて了ふさうだ。大旅館として斯んな宿屋のあることは、我國の誇りではあるが、客の待遇法其他の施設が之に叶はなくてはならぬ。日本流の宿屋以外、西洋人對手の所謂ホテルが、其設備の矛盾錯雜且不親切千萬な

ことは驚くばかりである。帝都に嚴めしく立つてゐる――と云つた處で其實南洋邊の第三流位のガタ〳〵普請だが――ホテルに、一人の佛蘭西語を話す使用人すら居ないなどは、一斑を以て全豹を推すことが出來る。處で殖民地では案外宿屋業が進歩してゐるやうである。臺北の日の丸館、大連の遼東ホテルなどは其尤なるものだ。朝鮮は妙に山口縣出身者の宿屋業者が多いが、これも伊藤公の遺德かも知れない。別の趣味から繁昌するのは新嘉坡の碩田館と哈爾賓の東洋館である。これは洋行者の米の飯を食ひ收め疊の上の坐り收め、洋行歸りには喰ひ初めの坐り初めと云ふ點で繁昌する。日本人は持つて行けるものなら、米と疊を擔いで世界一周をやりたいのであらう。

三六　汽車の中

汽車の中で醫長が婦長と同室したとやらで、近頃大分問題の火の手が揚つたやうである。汽車の旅も斯う問題になつては、ウカと旅行も出來ぬ。赤十字問題から全く離れて旅行の通則から云ふと、婦人室が滿員の場合、婦人客自らの申出でで男の客が同意した場合には同じ車室に男女を收容することが出來る、少くとも西伯利鐵道に在りては、これが習慣法となつてをる。これから以上は神の裁斷に任せて、紳士淑女の旅行に彼是申すべきでない。滿鐵で寢臺車を造る時分に、ダブル・ベッドの是非に就て多少議論があつた末、この設備が無ければ、毛唐人が乘るまいと云ふ落で、とう〳〵設備することに決定つたさうであるが、極めて至當な決定である。畢竟長距離の汽車は走つてゐる旅館であるから、設備にも其邊の心持ちが必要である。

歐洲漫遊で詩作に最も富んでをる者は故佐々克堂(友房)君であらう。

『眼中無處不平原、斜日斷雲烟樹昏、有似故園風致好、茅檐白堊數家村』

とは漢堡を發して途上汽車の矚目を敍したものであるが、外國に於ける汽車の旅の面白味は爰にある。伊太利から匈牙利及南露西亞へかけての農村農家の有樣は、何處も殆ど同樣で、汽車の車窓から遙か彼方に野良仕事の人馬が、所謂豆人寸馬と見える光景やら、炊煙の揚がる田舍家やら、塒に歸る鳥の群やらは、詩人でなくとも異鄕遊子の眼には、皆故鄕を偲ばせる料である。元來旅客外國人待遇方法の第一の誤謬は、外國人を强ひて都會若くは著名な勝景地のみで樂ませようとする傾向である。成程京都や東京や日光や奈良などは、孰れも西洋人の見たがる處には相違ない、併し汽車の客となつて展望車から、飾りのない田

舍の光景をパノラマの樣に眺めつゝ過ぎることも、彼等に取つて確に十二分の興味を感ずるに相違ない。これは吾々の西洋の旅行が證明する所である。實は都會と云ふものは孰れも大同小異で、特に外國のそれは甲の都會も乙の都府も大した相違はない、一を見れば他も推測が付く。田舍は景色でも風俗でも一々特色があつて飾りがない。鐵道院あたりの外客誘引策には、此邊にも着眼して貰ひたい。そして汽車沿道の矚目に遊情羈心を樂しませようと云ふなら、展望車はじめ列車内の設備を愉快氣にすることが肝腎である。

タイムスの最近の日本號に、日本での汽車内の光景が寫生してあるのには、一見して恐れ入らざるを得ぬ。長く座席を取つて寢てゐる者あり、隅の方に胡坐して非社交的態度を露出するものあり、事實である から致し方はないが、亂暴極まる車中の風俗である。夏季には金歯の

お客で肌襦袢一枚の豪傑あり、發車と同時に洋服を人前で浴衣に着更へる先生あり、百人百態で驚くばかりである。勿論列車内の設備も惡い、車中で着物を着替へたいと思つても適當な場所がない。座席にも一人分の定域がない。お客もこれでは不規律たらざるを得ぬ。尤も裸體論に就ては、例の洋行和服論及び海外日本娼婦論と共に、此三問題は私の久しく疑問としてその可否を決し兼ねてをる問題である。道理から言へば暑い國で肌脱ぎ位は當然である、自他共に之を行へば失禮でも何でもないとも言へる、況や車中の肌襦袢一枚なるに於てをやだ。此點に於てタイムス子は如何感じてアノ挿繪を入れたのであらうか、マサカに黄禍論の材料とはなるまいが、日本漫遊志望の外國來遊者を多少減す位の利目はあらう。

三七　寺と橋

風景觀上歐羅巴に比べて亞細亞の風物に三つの優れたものがある、寺と橋と湖だ。

亞細亞流に考へると旅行の對象には是非とも寺と橋とが欲しい。此の二つが日本や支那や朝鮮に於て如何に景趣を作し、如何に風致を活かすかは、恐らく西洋人の想像の及ばぬ所であらう。

歐米に亙つて頭等のお寺と云へば、何と云つても羅馬のサン・ピエトロ大寺院であらう。赤花崗岩の百三十二呎の尖塔、百九十八呎の奥行ある本堂、華麗宏大の點に於て世界に冠たる巨刹には相違ないが、只是れ建築學上の偉觀であつて、風景觀からは鑑一文の値打もない、寧ろ羅馬を俗惡するものである。英人の誇りであるウェストミンスター・アッベイは内外共に黑ずんでゐて、前者に比すれば餘程抹香臭い點はあるが、此の寺院から所謂「政治家廊下」と「詩人小路」とを取除けたなら、觀光客に取つては果して幾何の價値があるであらうか。これから見れば我が高野山や比叡山やは言ふに及ばず、一智恩院を以てしても、寺院そのものが直に景趣を作してをる。尤も支那のお寺は多少詩文の上で誇張されてをる嫌ひはある。有名な姑蘇城外の寒山寺にしても、平地にある見窄らしい俗寺に過ぎぬ。只支那と朝鮮の寺は荒廢のまゝ幾百年の雨打風敲に委せられた爲めに、大伽藍にしても山寺にしても却て四邊の風致を害するまでに立至つたものである。日本の佛閣特に古刹は、單に風景觀から見ても大事に保存すべきである。

橋も亦寺同樣である。巴里の七大橋は美ならざるに非ず、只風致があるか無いかが問題である。倫敦のタワー・ブリッヂにしても、一向に

感心が出來ぬ。そこへ行くと流石に羅馬だ、ノメンタノの廢橋一ッで澤山である、史蹟と畫趣と野情とを兼備へてをる。カムパニアの曠野に千年の青苔に包まれて、靜かに而も重々しく懸つてをる此の古橋は、楓橋夜泊の詩で有名な楓橋を一寸想ひ出させる。日本では兎角忘れられてをるが、周防の錦帶橋は世界的名物の一として可い。慶應三年に巴里の大博覽會に此橋の模型を出品したのは、幕府に尙人物があつたことを證據立てるに足ると思ふ。露西亞では西伯利のヤクーツス ク州に三百五十年ばかりを經た木造家屋が特に保存されて、珍とされてをるが巨材大石を聯ねて半空に懸けた錦帶橋は天下の珍であらねばならぬ。其他風景觀から見ると、我國固有の橋が如何に風景上重要な位置に居るかが分る。若しアノ畫のやうな吐月橋がなかつたなら、嵐山の風光は其半を殺がれるであらう。宇治にはアノ橋があればこ

そ、鳳凰堂も扇の芝も皆活きる。阿波の祖谷の蘿橋は山中の奇橋として暫らく言はず。市として橋梁に富むは大阪であるが、私は橋の大阪よりも、橋の新潟が好きである。誰れやらの詩には『八百八孀何所是、柳濛七十二橋頭』とあるが、渠每に橋を架した今日では、殆ど二百橋を算へるであらう。江戸時代の兩國橋、浪華の天神橋も、時代の要求で西洋式の鐵橋になつたのは致方もないが、市中の橋にしても、交通上差支へない場所には和風を保存したいものである。京都人が鴨川を始め能く橋梁風致觀を會得してをるかに見えるのは嬉しい。湖水の歐亞比較觀に就ては之を他日に讓らう。（大正五年八月記）

江戸より東京

（東京の今昔）

一

○子規の句に『加賀様を大家にもちて梅の花』てふあり、一吟『梅が香や隣は荻生總右衞門』の古句を聯想せずんばあらず、根岸子規庵は前田家所有の借家なり。

○子規の舊友門下相謀りて子規庵保存の計畫を立て、目下その讓受方を侯爵家に交渉中なりと傳ふ。

○目白臺の崖下關口龍隱庵は芭蕉翁の古跡たり、翁の句『五月雨に隱れぬものよ瀨田の橋』一句を刻したる所謂五月雨塚あり、俳門の子弟等その舊跡を失はんを憂ひ相謀りて建碑したりしもの。

○而も青山田中子あり、十數萬金を投じて忽に雅境を俗了し、優婉なる雅人の芳志と絶類なる江城の勝地とを盡滅したり、痛しい哉。

○想ふに現代の東京は百事新陳代謝の巷區、以て百年の常態を期すべからず、名人の墓碑、史上の古刹と雖も、地領一度成金者流の手に觸る、沒了せられずんば止まざるなり。『山茶花や根岸はおなじ籬續き』抱一の吟、尙現時の根岸を描けるが如きも、市街膨脹の勢の激甚なる豈遂に山茶花の籬を赤煉瓦の塀に代ふるの時到るなきを保せんや。

○九段阪上の地、往昔田安臺の稱あり、臺上今日薩長人の銅像二基の聳立して行人に臨むあり、吾人今にして東京研究の切要なるを想ふ。

○日本橋濱町は加茂眞淵翁閒居の地、所謂縣居の跡なり。『こほろぎの

鳴くやあがたの我宿に月かげ清しとふ人もがな』。今それ濱町一圓如何なる宿に滿たされ、街燈の陰如何なる人によりて訪はるゝ、思半に過ぐるものあり。

○江戸は荏處なり、荏草の野なりとは小山田與清の考證なり。而して荏處を化して繁華なる江戸たらしめたるは德川氏なり。

○而も德川幕府は其瓦解と共に江戸を崩壞したり。將軍の退隱と三百諸侯の歸國とは一時江戸の地をして一千坪廿五圓に下らしめぬ。『茶寮斷礎書樓址、鋤作千畦蕎麥花』と謠はしめたりしは此時なり。

○明治二年三月二十八日大詔煥發遷都の議あり、崩壞したりし江戸は復活して繁華の東京を生む。蓋し東京繁昌誌は當に其紀元を此時に取らざるべからず。

○吾人は思ふ、この新紀元を記念すべく勝海舟翁の大理石像を日比谷公園園內の一角に立て、更に舊江戸を記念すべく太田道灌の青銅像を上野の山內に建て、且東京遷都の三月廿八日を以て市の一大祭日と定むる、則ち可ならんか。

○麻布なる笄橋は「國府通ひ」橋なり、西南の諸侯皆東海道より神奈川に到り、品川を經、笄橋を過ぎて江戸の中央に入る。而して舊江戸の破壞も新東京の建設も亦この徑路に由りて行はる。江戸の破壞者毛利公の邸が偶〻品川の高臺に聳えて關門の觀ある、一種の感なくんばあらず。

○地方的勢力は東海道より品川を突いて侵入し、舊江戸の習俗は、今東京の東南端本所深川の地に窮追せられたるが如し。現時深川人の語に聞く、他區より轉住し來るを流込むと稱し、川を越えて他區へ至るを江戸向へ行くと稱す。

○蓋し深川藝者は安永以前の創設に起因し、往昔江戸藝者の粹と稱せらる、爲永春水の江戸藝者を描く、常に範を深川藝者に取れり。而も今日色を賣らずして意地に生き、古格を守りて羽織を着ざる者僅に二人を算へ得るに至りては、富岡門前の歴史も亦破壞せられたるが如し。

○深川の車夫に朦朧組多く、人力の車臺特に不潔なるを覺ゆ、江東の二區風氣自から他に異り、時に尙江戸の遺風を見る。而も江戸人が地方人のために江東に窮追せられたるの狀は、猶かの十六武藏の戲技に窮局に壓迫せられたるに類せずや。

○山の手は野菜の區なり、下町は肴の地なり。野菜は植民者の鍬鋤より產す、山の手に地方人多き所以なり。肴は水理に有緣し、水邊以外の地に轉ずるの便なし、下町に江戸人在來の定住多き所以なり。

○地方的勢力は先づ山の手に侵入して後下町に及べり、而して江戸ッ

兒的活劇は今尙多く下町より起る。驅馬の東海道競爭に都人士を集めんがため、日本橋を發足點としたるは智者の工夫なり、當事好事性の江戸ッ兒は群圍肩摩して鈍太郎君の風姿を窺ふに焦慮したり。江戸ッ兒氣質は僅に斯る間に現はる。

○河岸ッ兒神田ッ兒は所謂江戸ッ兒の粹なりしもの、而も今終に曾祖父時代の俠氣と勇肌とを望み得ず、然り昔は卽ち『鎌倉を生きて出でけん初鰹』の魚河岸なりき、今は冷藏車に由りて南海韓海の魚も亦到る、河岸ッ兒の腸時に腐色あるは已むなきの事態なり。若しそれ火事に至りては客年來或は祝融子の闕西地方に移りて、江戸の華の凋落と共に或は神田ッ兒任俠の風亦變態を呈せるなからんや。

○三井は當代金權者流の尤なるものたり、頃日偶〻駿河町を行くに三井自家用の發電所より三越へ架せるの私線、天下の公道を横つて延々

たるもの數十條、宛として長蛇の空に横はるが如し、而して今時神田ッ兒の山車は唯々として此金權の鐵線下を潛るを見ずや。

○『百萬石の加賀樣も擔漢の行商も五分と五分とで歩けるが江戸の花』、これ眞に舊時江戸ッ兒の誇たりしに非ずや。

二

○地方的勢力の東京侵入は決して今日に始まりたるに非ず、伊勢屋、稻荷に犬の糞は卽ち往昔における地方的勢力の江戸侵入なり。

○天正十八年家康の入國は奉行板倉勝重の辣腕に待ちて江戸市の基礎爰に立ち、伊勢、堺、京都よりの移住者競うて市街を成す、肆舗の暖簾、伊勢屋の三字を染出すもの當時その半を超ゆ。

○かくして關西の移住民は稻荷を遷祀し、新開地の警護に犬をも移したり、朱の鳥居と犬の糞とが江戸を占領したりしは一に伊勢屋氏の賜なり。今の東京人が輕々に上方贅六を罵倒するは卽ち祖先を侮辱するなり。

○犬の糞は開市の基にして亦市繁榮の一現象たり、今の警視廳が徒に犬の口箝令を勵行して、彼狗兒が無名にして而も大功ある市の一要員たるに想及ばざるは憫笑に堪ふ、犬の口箝令勵行に忙しき市の警吏は近時頻々として大罪を逸するが如し。

○東京の菓子誌を見る、榮太樓は甘納豆を以て、龜樂はせんべいを以て、鹽瀨は饅頭を以て各特色あり、而も歷史的にして最も古き東京特有の菓子を「いまさか」と爲す、いまさかは美作餅の傳訛、亦實に地方力の江戸侵入を語るもの。

○今の佃島は攝津西成郡佃村漁夫孫右衞門の江戸に召されて拓きた

りし處、孫爺漁業をこの處に許され、漁獲の一部を公方に納め一部を日本橋に送りて賣る、魚岸河の濫觴なり。

○江戸を形成したりし地方力は復江戸を破壞したり、而して今日の東京は雷に地方力の亂入に因りて渾沌たるのみならず、亦漸くにして泰西習俗の帝都の風物人心を擾亂せんとするあるを見る。

○吾人は曾て淺草公園十二階の頂上より投身したりし壯者ありしを聞きて浩嘆を禁じ得ざりき。拳銃の由殺と層樓の投身とは由來白人の卑劣なる自殺法なり。

○高處よりの投身我に清水の舞臺あり、千疊の廣闊脚下に百年の老樹と蒼苔の溪地あり、死處にかゝる仙境を擇ぶは東洋人の特風にして又古人の心なり。淺草の如き人群雜鬧の俗巷に秒時の死を竊まんとするは、偶〻白人の醜劣に學ぶもの、町奴を誇としたりし江戸ッ兒の斷じ

て取らざる所。

○若し東京において此種の層樓を擇ぶ、城南愛宕山上の愛宕塔の如き可ならんか、深樹山腰を繞り、塔上眼界の雄濶なる、一氣東京灣を呑むべし、丈夫兒の死處は當にかゝる大觀境ならざるべからず。

○今の國技館なるものを見る、宛然西洋の手品小屋なり。靜軒子繁昌記に相撲を敍する數千言、『扇揚矣、一齊喝采之聲、江海飜覆、各抛物爲纏頭、自家衣着、淨々投盡、甚矣或至於褫傍人短掛』と、相撲の樂は此點に多し。四本柱を蔽ふに洋風の丸天井を以てせるは衣冠して力技を試みんとするに似たり、白人の工學は江戸の一名物を滅せり。

○然り純江戸の風は外來勢力の侵入に會うて年々に消磨し去る、その間獨り東京藝者が帶に誇を存せるは多とすべし、新柳の阿嬌一夕の小宴に侍する尙且千金の帶に裝を凝し來る。

○『妾が姉さん三人ござる、いつち好いのが下谷にござる、下谷一番伊達者でござる、五兩で帶買て三兩でくけて』、江戸の鞠唄一節、以て江戸女の伊達氣風を見るべし。東京藝者の帶に數百千金を吝まざる、亦この餘風とせんか。

○されど若し彼等の内部を精査し來る。江戸藝者の意地は早く既に消え、僅に昔日の形體を一丈五寸の帶の上に留むるは寧ろ憐むべしとす。

三

○造兵前に附燒麵麭を賣るもの、年來の露店なりき、外遊數年後の今日既に在らず。電車の水道橋畔に四通して行人多忙、一片の附燒麵麭に歩を停むるの遑なきに至れるが爲なり。

○砂糖醬油の附燒麵麭と大福餅とは共に街頭の露店子にして、共に勞働者の好伴侶たり、大福は形の大値の廉、而して其熱を以て特色となす。而も電鐵の勞働者割引の便は、三十萬の勞働者をして亦路傍の露店に舊伴侶を訪ふの遑なからしむ。

○平民黨の常食に煨薯あり、東京の冬を談ずる、煨薯を逸すべからず、かの竈烟蒸々焦香芬々たるもの終に忘るべからざるの趣味あり、二十年前の書生は銅貨二錢を煨薯に投ずる、優に一朝の飢を醫するに足れり。

○東京全市燒芋屋の總數最近實に一千百九十有二軒、而して本所深川淺草の最も多く、山の手之に次ぎ、麴町區の僅に二十六に過ぎざるは、燒芋が非貴族的にして而も今尚多く貧士寒生の間に愛顧せらるゝを想見すべし。

○吾人は山の手借家の一室に雜書堆裏、新聞紙包に五錢の燒煨に手を

觸るゝの時、未だ曾て甘藷先生青木昆陽を想はずんばあらず。東京芋問屋の習俗、例年先生の忌日に總代を選びて甘藷先生之墓に展せしむ、蓋し美風なり。

○若しそれ良家の令孃、教坊の阿嬌が唇を窄めて「阿薩」と呼ぶに至りては彼甘藷子一身の榮も亦大なりとすべし。

○麹町一番町の燒芋屋、一角を曲れば則ち二松學舍あり、學舍の書生旦より夜に至るに五十錢の大注文を更ふること、日毎に五六回す、中洲先生も亦時に二三片を握つて講義に冷えたりし兩手に暖を取る、三十年前の事實たり。

○今の東京の書生多くは燒芋趣味を解せず、徒に之を下等視して好んで輕便西洋料理屋の類に集る、而して此種料理屋の店頭必ず二三の妖婦を備ふ、本郷、神田、早稲田方面特に多きが如し。

○牛込赤城社内の清風亭は元早稲田學生の開拓する所半日の席料三十錢を超えず、而して席上盛る所燒芋と煎餅とのみ、故圓城寺君の如き亦當年芋黨の一人たり。今日の清風亭、學生の會合猶昔日の如くにして、而も多くは會席膳を据ゑ、時に或は藝妓の侍するに會ふ。

○『早稲田是好個地、魔風戀風常習々』一篇の俗謠固より早稲田一萬健兒の眞價を增減すべきに非ざるも、而も親しく其謠ふを聽く毎に、吾人未だ曾て當代帝都學生一般の習風を痛嘆せずんばあらず。

○江戸に侵入して、江戸の舊習俗を恣に破壞したりし地方人は、自から建設したる渾沌の東京に、今自家の子弟を送りて其品性の破壞に放心なるが如し。

○四谷見附外三河屋は三十年來の老亭、額に鐵舟先生の揮毫あり、客に各省の官吏あり、牛肉屋として、氣品を備ふる破格なりとせらる。

○偶〻新來の婢稍美なるもの到る、容姿酷だ萬龍に似たり、乃ち「三河屋萬龍」の名、山の手に喧傳せらる。思ふに三河屋も亦四谷見附の破壞と共に其特風を放棄し去れるが如し。

○附燒麺麭、大福餅露店の減少は未だ遽に勞働者の苦痛なりと速斷すべからず、獨り煨薯の閒却冷遇は帝都二十萬書生の風紀問題なり。吾人は當年の經世家昆陽先生を起して一策を問はんと欲す。

四

○淺草における寺領佛閣數十を算ふべし、橋場の總泉寺の如き世に最も知らる、而して平賀源内と寺門靜軒とが靜に寺内の一隅に眠れるは好配遇なり。源内は社會研究家にして靜軒は社會觀察家なり、若し兩先生の當代に在る、一は社會主義の調和者たり、他は好個達識の三面先生たらん。寺内兩者の舊墓石に對して、曩時更に根本通明先生が新墓石を横ふるに至りて感興更に增せり。

○本所回向院に鼠小僧の墓に對して千蔭の墓あるは不調和の極なり、特に詞宗の多く忘れられ、鼠子の墓前常に香花の絶ゆるなき、恨なき能はず。

○山内容堂は一代の豪なり、容堂橋場の別邸醉擁美人樓あり、詩酒風流一日の暮向一百兩と稱せらる、廣く天下の士を招きて天下を論じ文學を談ず、政治の談敵としては東湖あり、文學を語るに宕陰あり。

○容堂好んで武陵罪人の雅號を用ふ、その親善なりしもの松平春嶽及び伊達宗城と爲す。

○築地海軍省屬邸の地、元稻葉長門守邸址たり、邸は侯の別墅江風山月樓と稱す、寛文二年海汀を塡め、年を越えて土工成る、眺望絶佳人をして

洞庭の秋光を想はしむ。

○芝離宮は舊紀州邸なり、水石樹木の布置幽妙を極む、梅翁の所謂『芝といふものの候夏座敷』一句能く此邊一帶の風光を描寫し盡せり。

○東京名所唱歌なるもの近時帝都子女の好んで謠ふ所、吾人は試みに二百六十八年前のそれを記して懷古の料に資せんか、寛永二十年色音論なるもの卽ち是。

○「時も移れば四ッ谷とや、月の隈なく差出でて、今宵を照す赤阪の、御影をうつす溜池に、麻布の森の木末より、おろす嵐に立つ波は、西の久保にや宿るらん、北にあたりて隱れ家の、霞が關と聞くからに、心を留めてながむれば、櫻田さくや山の手に、出入御門の建ちけるを、霞の門と名けたり」。

○武江の庭園を說くもの、後樂園を逸するを容さず。舊水藩の本邸卽ち礫川の上屋敷なるもの、後樂園の名、明の遺臣舜水の命名にして門額亦その揮毫に係る、園中泉石の蒼古なるに對して道春の小廬山記を讀む、史感詩興交々湧くを覺ゆ。

○今の戸山學校は舊尾州家の別墅、元外山の字を用ふ、紀平洲の戸山山莊二十五景詩一誦すべし、木石の舊に仍るもの今尙存す。而して今この二園が偶〻陸軍の所管に屬し、前者の動もすれば、寺內君のために園遊會場として沒趣味なる武人野婦の靴踵屐底に蹂躪せらるゝあるは前人の設計と趣味とに對して恨なきを得ず。

○吾人は樹木の東京より帝都の公園を瞥見して一說を試みざるべからず。

五

新宮の名を誓る
清新所
下谷の元神下（下仲を下るから
おりを在）